

ボッチな美少女は孤高のボッチを見て育つ

Iタク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

記憶が無い美少女は、彼と同じく残念なボツチだった!? 彼や奉仕部員たちと関わり少しずつ蘇る過去の記憶。

果たして彼女は全て思い出せるのか、そして一体彼女は何者なのか……

ボツチの問題を解決できるのは、やはりボツチだけ。

初投稿です。

思いつきたことを適当に書いてるだけなので文章おかしいかもしれません…

暇つぶし程度に読んでいただけると幸いです。

改善点などありましたら、遠慮なく教えてください嬉しいです

追伸

警告タグに「オリ主」とありますが、物語の進行上「オリ主」ではない部分が多々あります。ご了承ください

11月30日

目次

ただ本音を綴っただけの日記	
日記その―― 全てを諦め、決断した日	1
日記その△ 不安を抱き、希望にすがりついた日	4
悪戦苦闘する日常〈Girl's side〉	
彼女はただ困惑し、現状を見つめ直す	6
ボツチを引き寄せたのは1冊の文庫本	10
ようやく自分の家に帰る	17
焦りと不安での脳内エラー	22
こうして彼女の1日が終わる	26
朝から部活があるのは運動部だけではない	33
とある友人の恋文(ラブレター) ①	39
とある友人の恋文(ラブレター) ②	44
とある友人の恋文(ラブレター) ③	54
とある友人の恋文(ラブレター) ④	60
とある友人の恋文(ラブレター) ⑤	65
つまり私は最初から間違っていた。	81
悪戦苦闘する“非”日常〈boy's side〉	
比企谷八幡への個人依頼	95

ただ本音を綴っただけの日記

日記その一 全てを諦め、決断した日

この日記を書き始めてからもう1年はたつ頃でしょうか。日記を見返せば見返すほど自分という人間がよく分からなくなります。

今回もいつもと同様、何もない普段の日常でした。いつも、というか、ここ最近になってこれが普通になってきたと言った方が正しいですね。昔の私なら今の自分を見てどう思うのでしょうか。悲しく嘆くのか、憐れむのか、激怒するのか、まあIFの話なんてするだけ無駄ですね。

人と話さないからか、うまく言葉が浮かんでこなくなりました。人間の特長である言葉によるコミュニケーションをサボっているのです。こうなるのも無理はないでしょう。けれど、さすが私。日記など文字にする分には何も支障はありません。勉強のことに関しては母から厳しくされているので、そのことに関しては劣るわけにもいかないのですよ。

まあ、そんな母だから、今の私の現状にも気づかなかった…いえ、気づくことをしないでくれたのでしょうか。無駄に心配をかけたくないので、私にとっては都合でした。

しかし、それを言うとう父にはとても心配をかけました。幼い頃から私の嘘にも絶対に気づいて叱ってくれましたね。けれど私は、それが嬉しかったのです。父だけは私のことをよく理解してくれました。よく聞く話で、息子は母を、娘は父を慕うと言いますが、その表現は言い得て妙ですね。私がこうやって生きているのも、父のおかげだと自覚しています。

妹の——にも、色々と迷惑をかけてしまつて…こんなお姉ちゃんでごめんね？もつとみんなに自慢出来るお姉ちゃんが欲しかったよね。私は——のことを自慢の妹だと主張できるよ。貴女は優しい、貴女は可愛い、貴女は天才。私なんかを見ないで、もつと上を目指すんだよ。

さて、毎回何かあるごとに書くこの日記ですが、何も無いと言っていたのに何故書いているのかと言うと、

今日は私の、誕生日なのです。

去年は楽しいパーティーがあったのが懐かしいなあ：周りにはたくさんの“他人”で溢れていたよね。けど、ホントに楽しかった、嬉しかった、そんな感情を抱いたのは多分あれが最後だった。

プレゼント、今年は何にしようか。それをここ数日考えていた。

そして1つの考えにたどり着いた

多分こんなことを言ったらものすごく怒られちゃうなあ：いやだなあ：

けど、もう迷わない。

私にはもうこれしかない。

父さん、母さんには内緒だよ？

父さんより母さんが怒った時の方がもっと怖かったんだから。

ねえ父さん、

聞いてくれるよね？

私が願う、

最後のプレゼントを――

日記その△ 不安を抱き、希望にすがりついた日

こんなものを書くこうと思っただのは恐らく初めての事だと思います。新しく始まった学校生活、慣れない環境、確立されていない人間関係、そういった不安を少しでも和らげようと、そう思いこの日記を書くことにしました。

案外こういうのもいいかもしれませんね。自分の本音が目に見えるというか、自分という人間がどんな感じなのかなどなど、始めて正解だったかもしれません(笑)

さて、今日は何度も書いている、通り新しく始まった学校初日にこの日記を書いています。

もう………なんと言うか……色々疲れた1日でした……

初っ端から大ピンチ！

まさかの校舎内で迷子！(笑)

あのときはホントに焦ったなあ、たまたま先生が通り掛かったから良かったけど……それにしても校舎内で迷子って、物覚えが悪すぎでしょ私。

そして避けられないイベント、クラスのみんなへ自己紹介。さすが進学校、こんな美少女が自己紹介してるのにほぼ無反応……！多少の男子がざわついた程度……地味にショック

けれどここからだよね、初日なんてみんな自分を出せないもんだよ、だから私だってここから自分を出せばそれなりにやっていけると思うんだよね。

明日からはどうしようかなあ……自分から話しかけた方がいいのかなあ……

でも急に話しかけられたら相手も困惑するよねえ……今日私すぐ帰っちゃったし、すでにグループが出来ちゃってたらどうしょ……

まあ仮に作られたとしても、その時は向こうから話しかけてくるよね。時間はかかりそうだけど、慣れちゃえば絶対楽しい日常が待って

るハズ！頑張れ私、今は耐える時だ！

そういえば、なんか部活の勧誘とかあったようななかったような……まっ、いつか。明日どうせ学校行くんだし。

始まってすぐ授業つてのも進学校の特徴なのかな、難しくついていけなかったらどうしよう……

けどなんかみんな私のこと優秀とか言ってたし、多分余裕……言いすぎか、いやこの場合だと書きすぎか、多分ついていけるよね。つまり余裕かな。

あ、そういえばテストがあるとか言ったなあ。しかも定期テストじゃないのにクラスにその点数載せられるらしい……一気に不安が高まってきたよお……

大丈夫かなあ……やっぱり勉強したほうがいいかな……

まあでもさすがに酷い点数は取らないでしょ。何より超絶眠い
(笑)

人間やつぱり昼間に疲れて夜ぐっすり寝るのが一番だよ。けどゲームしちゃう人の気持ちも分かるんだけどさ。

そんなこんなで濃い一日でしたー。明日も平和な1日でありますように――

悪戦苦闘する日常〜Girl's side〜
彼女はただ困惑し、現状を見つめ直す

今私は、恐らく学校の廊下であろう場所に立っていた。

生徒が学校にいることは何も不自然な事じゃない。

では何故こんな当たり前のことを再確認したかというところ、ここに至るまでの記憶が全くないのだ。

正確に言くと、恐らく日常生活には何も問題ないのだが、自分のことがまるで分からない。わかったことと言えば、自分が制服を来ていくということだ。少なくとも中学生または高校生であることはすぐに分かった。無論思い出せないのだが…

——記憶喪失

私が真つ先に浮かんだ可能性がそれだった。

しかし私は運動系の部活に入っていないし、何なら部活そのものに所属していない…はずなんだけど…。では、事故もしくは誰かからの暴行か何かで頭を強く打ったのかな。ふと、すぐ横にある窓に微かに反射して見える自分の姿を見た。そこに映る自分の姿を見て…

…すごく綺麗！あ、これ私なのか。

あー、これは女子からの嫉妬かなにかで殴られた可能性が高いいや絶対そうだ、こんな美少女が傍にいたらそりや劣等感生まれまますよホントに。……ごめんなさい調子に乗りました。

ともかく、自分の姿は確認できたが、名前その他もろもろがわからない。不思議と冷静にいたが、割と深刻な記憶喪失のようだ。身の回りに何かないか、と探していると、胸（恐らくサイズDはあった）ポケットに学生証と紙切れが入っていた。

総武高校2年J組 橙山冬華《とうやま とうか》

良かった、と自然と口に出してしまった。しかしとりあえずこれで自分が誰なのか理解出来た。早速自分の教室に戻りもつと情報が欲しい…！今ここにいるということは休み時間か、移動教室なのか、ともかく2年J組の教室に…

「おや、こんなところにいたのかね？ 転校初日に迷子とは、昨日学校見学はしたはずだろう？」

「ひゃっ!？」

え、なに?! 誰?!

「おつとすまない、驚かせるつもりはなかったのだが、君がなかなか教室に来ないと、担任の先生に搜索を頼まれてな。」

びっ、びっくりしたあゝ…心臓出るかと思つたよお…

………転校？

「…あつ、あの…えつと、転校つて…もしかしなくても私が…ですよね？」

「君以外にいないだろ？ 何かね、今のは軽いジョークだったのかな？」

先生、であろうこの女性は少し笑みを見せたあと、私に背を向け再び話しかけた

「では案内するぞ。こんな時期の転校だ、あまり慣れない気持ちもわかるが、少なくとも自分の教室くらいは覚えて帰りたいまえ。」

「すつ、すみません…善処します…」

怪我の功名とはまさにこの事ですね！ 驚いたときに学生証と一緒に入った紙切れがどっかいつちやつたけど…よし、自然に教室に行ける！まさか私が転校生だったなんて、これならここに詳しくなくても転校生だからって言い訳が使える。少し不安だけど、この先生は良い人そうだし問題ない…と思う。

どうでもいいけど「善処します」って便利な言葉だよな。ホントにどうでもいいけど

にしても、話しかけられて第一声目が『ひゃっ!？』って流石に酷いだろ、と思つている人たち。仕方ないじゃんボツチなんだから！そういうのに慣れてないんですよ！

…私ってボツチなの…？

「えー、本日よりこのクラスに入ることになった…」

先生が続きは自分で言え、と目で語ってくる。

「えつと……とつ、橙山冬華？です。宜しく願います…」

……

……

……視線が痛い…なんという無反応。ちよつとくらいヒソヒソ話したりしないの？真面目すぎなのでは？

あ、男子はちよつとニヤニヤしてる。そしてそれを周りの女子が冷たい目で黙らせる。

やめて！私の為に争わないでっ！

…ごめんなさい言いたかったです。

あつという間に午前中の授業が終わり、私は昼休みの間に知り得た自分の情報を頭の中でまとめてみた。

まずこの学校は共学であること。

このクラスだけ見ると女子高かと思っただが、数名男子もいて、ここに来る途中他のクラスを覗いたが、普通に男子生徒もいたことから、ここは特殊な学科のクラス。または周りより偏差値の高い生徒が集まるクラスと予想される。

次に、ここに私の情報が全くないこと。

カバンやら机やら色々探したが、分かったのは先ほど確認した名前だけだった。

…いや、強いていうなら、恐らく私は前の学校でもボツチだったのだろう、という確信である。

休み時間、私に話しかけて来た人は何人もいたが、正直苦痛でさえあった。多分顔に出ていたと思う。放っておいてほしい、関わらないで欲しい、そんな感情ばかりが生まれてくる。そしてそのことに、若干の懐かしさを感じたのだ。

まあ、休み時間にあれだけ失礼な態度をとってたんだ。もう話しかける人なんていない……

…………そう思っていたこともありましたよ。

気づくと目の前に、私以じ…………同じくらい綺麗な美少女が立っていた。

さて、何をしてくるのか……

- 1 友達になつてあげるの言ってくる
- 2 外見が少しいいだけで調子に乗るなことを言ってくる
- 3 親切心から校舎案内をしてあげるの言ってくる
- 4 実は百合ゆりなので、可愛い私に告白してくる。

シンキングタイムスタート！

ん、2と3はないかなあ……

外見に関しては自分で「私、可愛いから」とか言つてそうなんだよねこの人。ごめんなさい偏見も過ぎました

かと言つてわざわざ校舎案内を自分から進んでやるかなあ……

そう考えるとやっぱり1番かな。この状況ならこれが普通だよ。

誰だよ4の可能性考えたやつ絶対に可愛いだろ。

…………、言うわけで1番！

「橙山冬華さん、だったわね。急で悪いのだけれど、付き合ってもらえないかしら。」

…………おっふう……

まさかの同性から告白された瞬間であつた。

ボツチを引き寄せたのは1冊の文庫本

「急で悪いのだけれど、付き合ってもらえないかしら？」

うわあ！同性から告白されちゃった☆

なんて考えは一瞬でなくなつた。さすがの私でもそんなこと本気では思わない……………

……………いやホントだよ!?

学級委員とかそんな感じの役職なのだろう、転校生をサポートするように先生から言われたのかな？先生絡みなら断るのは流石に難しい。もしかしたらこの人も嫌々やっているだけでホントは面倒くさがっているだけなのでは？

もしそうなら尚更断れない。強制的にやらされていることを阻害するような行為は相手の反感を買う恐れがあるからだ。

「……………いいですよ。どちらに行くのですか？」

なんか自然に敬語になつてしまった……………だつてこの人なんか怖いんだもんっ！言葉といい、オーラといい、威圧感半端ないよ！

「平塚先……………生徒指導の先生からあなたを部室に連れてくるように言われているのよ。ここは大人しく従つてくれないかしら？」

あんた人にものを頼むの下手すぎるのでは……………元氣玉発動させるために地球人に手をあげるよう説得するサイヤ人の王子並に…

なんか一周まわつて脅しに聞こえるというか脅されてるの私？今つて尋問タイム？ここまでされたら色んな情報吐いちやうよつてだから記憶が無いんですつて。

「わっ、分かりました。では放課後伺います。」

正直、会話を長く続かせるのはあまり好きではない。話せば話すほど相手に心を許しそうで怖い。記憶が無い今の状態でそう思うのだ。通常の私なら下手をすれば会話すらしなかつたのかもしれない。

「ええ、ありがとう。では先に自己紹介を、私は雪ノ下雪乃です。」

……………

.....あ、終わりなの?!

いや別にいいんだけど、なんかこう……〇〇部に入ってますとか、もうちよい情報くれてもいいと思うんだけど……。私だったらもつと……うん、名前だけかな。ベストイズシンプル！雪ノ下さんいい自己紹介だZE☆

「あ、えっと……橙山冬華？です。ところで部室って、雪ノ下さんは何かの部活をやってるんですか？」

「まあ、それは来ればわかると思うわ。それと、自分の名前くらい堂々と叫ぶなさい。」

「あつ、あはは………すみません……」

記憶が無いんですよ、なので自分の名前すら自信を持って言えませんが、なんて言っても変人扱いを受けそうで言わなかった。そもそも誰かに言う気すら起こらないんですけどね。

そんなことを思いながら、私は雪ノ下さんに放課後、部室まで同行したのだった。

一つ気づいたことがある……

この人絶壁なんだなあ（どこが、とは言わない）……

そう思った瞬間寒気がしたのはただの気のせいだと思いたい……

* * * * *

「おお雪ノ下、すまないな。急に頼み事をして。」

どうやら生徒指導の先生というのは、先ほど私を教室まで案内してくれた先生だったようだ。

「いえ、いつもここに来ているので何も問題ありませんが、橙山さんと呼んだ理由を聞かせてくれませんか？」

全くだよ………何でこんな怖い人に連行されないといけないのか……たんですか……

「そのことなんだが、雪ノ下、一つ私から部長である君に依頼をしたいんだよ。」

「……………依頼？」

「……………なるほど。で、その内容は？」

「いやあのちよつと、え、何これ？部活で、依頼？」

「転校生と言ってもただの転校生ではない。この学校始まって以来初めての転校で国際教養科へ入った生徒だ。彼女の優秀さは雪ノ下、君と肩を並べるほどと言ってもいい。しかし、特に勉強に力を入れていくクラスだからな、あまり私からこのようなことを言いたくないのだが……………」

「優秀ゆえに、橙山さんがクラスで孤立する可能性がある、ということですか？」

「なんか急に話が進んでるんですけど……………なるほど。先生としてはそれを未然に阻止したいと…」

それはそうと、私優秀なんですね。

「まあ、あくまで可能性の話なんだかな。用心するに越したことはないだろう。」

「なるほど、そういうことであればできる範囲で協力しましょう。」

「すまない雪ノ下、助かるよ。」

何となく話は掴めてきた。

恐らくこの部活はお手伝い屋みたいな感じなのだろう。だから先生から生徒へお願いをしている。

それと、部室の位置からしてあまり表には出ていない部活なのかもしれない。そう考えるとわざわざここまで連れてきたことにも納得がい……………いかないけど。

「そういうことだから橙山、何か困ったことがあれば雪ノ下…もとい、奉仕部を頼るといい。生徒同士の方が何かと相談しやすいだろう。」

生徒指導の先生だけあって生徒のことを思つての事なんだろう。そして頼まれた雪ノ下さんも嫌な顔一つせずに協力してくれた。部活とは言え見知らぬ人の世話などめんどくさいに決まっているのに、凄い人だ。部長を任されるだけのことはある。

先生も、このようなケアをしてくれる教師なんてなかなかいないものだ。朝も、私のことを探してくれたしちゃんと注意するところはちゃんとする。教師の鏡のような人だ。

そんな2人からの提案を私は……

「いえ、そういうのいいので」

と、迷うことなく断った。

* * * * *

あ、まだ部室にいますよ。

「うむ………どういふことかね？」

先生は怒っている表情を浮かべることもなく、私の意見を真剣な顔で伺ってきた。

「先ほど、クラスで孤立すると言ってましたが、私からすれば好都合なんですよ。友達とか、作れないわけじゃない。ただ作らないだけなんです。他人に合わせるだけの会話とか、いちいち相手の反応を気にしながら接しないといけない立場とか、色々がめんどくさいんです。なら普通に考えて一人でいることが1番効率がいいじゃないですか。なにをやっても自己責任だから他人の迷惑をかけずにすむし、休日とか一人で好きな様に過ごせる。だから友達なんてものは作らない。軽くイジメを受けて孤立するくらいが丁度いいのでさっきの依頼はなしということ。お気遣いどうもありがとうございました。」

言ってやった。しかしこれだけ適当なことをよく言えたね私。まあでもこれで完璧。邪魔されずに自分のことに集中できる。

そもそも自分の現状に今いっばいいいいっばいなんだから他人に構ってられないんだよね。良い人達だったけどこれだけ言ったらさすがに怒ってもう近づいてこないでしょ。これでおしまい、はいさいようなら………

……ふと雪ノ下さんの方を見ると、「はあ……」とため息をついていて、先生は眉間に手を当てて呆れた顔をしていた。

……1人と、備品が1ついるわ。転校初日からというのも酷な話だから、参加するのは明日からで構わないわよ。一応連絡先を交換したのだけれど、いいかしら?』

おっと、3人じゃなくて2人と備品1つだったZE☆

その備品さんが私と同じって言ってた人かな?だとしたら今日で備品が1つ増えちゃったテヘツ♪泣きそう。

などと思いつながら連絡先を交換したあとすぐ教室にカバンを取りに戻り、下校することにした。

そういえば雪ノ下さんって割と昔の携帯使ってたなあ。あまり気にしない人なのかな:まあ私も友達いないから別に買い換える必要が:あ、雪ノ下さんもってことですねわかります。

下校途中、小さな本屋を見つけた。そういえば今日、カバンに本が1冊もなく午後の休み時間とか寝たフリをしてたなあ、とどうでもいいことを思い出し、明日以降休み時間を楽に過ごすために本を買っておこうと、とりあえず入ってみることにした。

記憶のあつたときの自分はどうかは知らないが、今の私は本、特にラノベが好きらしい。1冊手に取って読んでみるとこれがまた面白い。これは休み時間が楽しみになってきましたよー!と、色々な本を読んでいると、何やら見覚えのある本を見つけた。

これは:何か懐かしさを感じる。私について有力な手がかりになるかもしれない!その本に手を伸ばすと

「あつ……」

まさかリアルでこんなシチュエーションにあうとは思ってなかった。これってここから恋が始まる展開に……!

……何を考えているのですか私は

とりあえず謝らないと:そう思いその男性の顔を見ると……

「……あなたはゾンビですか?」

「え、なに俺チエーンソーで両断されるの?」

目が腐った男性がそこに立っていた。

ようやく自分の家に帰る

なんてことだ……………

初対面の人に対してあんな失礼なことを言うだなんて…………。完全に私に非があることだが、少しばかり醜い言い訳をさせてほしい。

身長は高くもなければ低くもない平均的な高さ。顔立ちも整っていて良いか悪いかを聞かれれば良いほうだ。髪の毛は癖はあるが逆にそれがいいアクセントになっている。

ここまで言うとはホントに理想的な運命の出会いをしたように思える。

しかし、

しかしだ、

これらのプラス要素も、目が、この腐った目が全てを台無しにしている。

別のものに的確に例えるならゾンビとか屍とか死体とかそんな感じ…………って全部一緒ですね。

そんなわけで、これは恐らく誰しも感じることであると思われる。私は思ったことを正直に口に出してしまっただけなので今回の件は無実…………なるわけですね。すよね知ってますからはい。

「すつ、すいません！いきなり失礼なことを言ってしまったって…ホントにごめんなさい！」

相手は男だ、もし怒って手を出してきたらどうしよう、とか、そういったことは不思議と思わなかった。私が美少女だからそんなことをする訳がないだろう、と言った自惚れた理由などではない。そうではないのだが…………これは口で説明するのは難しいなあ…

「ん？ああ、別に気にしてないから安心してくれ。むしろここまで丁寧に謝られてそっちの方に困惑してしまってる。」

色々考えていると、相手の男性が私の思考を止めるかのような安心させる言葉を投げかけてきた。

「いえ、悪いのは完全に私の方なので。あ、この本が欲しかったんですよ？どうぞ、私は別にそこまで欲しい訳では無いで。」

お詫び、なんてものにはならないが、このくらいするのは当然だろう。まあホントにそこまで欲しかったわけじゃないから仮に失礼なこと言ってもなくても譲ってたけどね。

「……あーその、なんだ……」

「……」

「あ、そうそう。今思い出したんだがその本もう買ってたわ。あつぶねえ、もうちよつとで無駄に買うところだったぜ。つーわけで、俺はいいよ。気を使わせて悪かったな。」

「……！」

男性の言ったことは恐らく嘘だ。それは多分私でなくてもわかる。別に断るだけならいくらでも言い方はあったはずだ。しかし、この人は私に譲っただけでなく、先ほどの件を私が気にしないようにわざわざこのような言い方をしたのだ。

実に不器用な言い方だ。けれど、その不器用さに温かい優しさを感じる。何故だがその優しさが懐かしく感じた。記憶喪失以前の私たちはどこかで繋がりがあったのだろうか？

……あるいは……

「……どうした？」

長長と考えていると男性は私の様子を心配するように伺ってきた。

「あ、すいません。ではその……お言葉に甘えて……えっ……」

なんとという事だ……。財布の中身を確認するとあるのは1円玉や10円玉ばかり……

これが最近のJKの財布の中身なの?!以前の私はバカなの?!何この駄菓子屋特化型の財布!?

なんか急に恥ずかしくなって泣きそうになって来たよ……

「あつ、あの……お金が無かったのだからやはりそちらに譲ります。すいません、譲ってくださいったのに……」

「おつおお……そうか。なら仕方ねえな。」

うう……ホントに恥ずかしい……。顔から火が出るってまさにこの事だよ……。とりあえずここから出よ……

そういえば名前聞きそびれちゃったなあ……まあ同じ学校の制服

だったしまった会えるかな……

そんなことを考えながら書店を出ようとした時、

「おい、ちよつと待ってくれ。」

先ほどの男性が声をかけてきた。やっぱり怒ってるのだろうか？ そんな不安が急に高まってきた。

「……はい、何でしょうか？」

「さっき妹に確認したらやっぱり買ってたわ。買ってすぐ店に持って来ましたって返すのも恥ずかしいし、貰ってくれね？」

……この男性は私のことが好きなのだろうか。何故ここまで人に優しく出来るのだろうか……いや、私が優しさに弱いだけなのだろうか。

とにかく何か言わないと……

「……お優しいんですね。惚れそうになりましたよ。」

おいおい何言ってるの私。

「いっいや別にそういう意味でやった訳じゃないんだが……不快に思っただんならすまん……」

いや不快に思っただなんて言ってますんからね?!

「いや不快に思っただなんて言ってますんからね?！」

心の声が出てしまった。

「いやだっってお前……」

「……………?」

「……………なんで泣いてんの?」

* * * * *

どうしてこうなった……………

書店の前で何故か泣いた私は、男性……………いや、比企谷くんに家まで送ってもらうことになった。彼いわく、泣いてる女子をこんな遅い時間にほって置いたら妹になに言われるかわからない、とのことだ。妹さんが怖いのか彼が妹のことが好きすぎるのかはあまり考えないでおこう。

とりあえず、泣いたおかげで名前を聞けるきっかけを作れて案外良かったかもしれない。

まあそんなわけで、短い時間だが、私は男性と時間を共に過ごすことになった。

「その、橙山の家がどのへんとか、聞いてもいいか？」

静寂の中、先に言葉を発したのは比企谷くんだった。

「え、あ、はい。いいですよ。えっと私の家は……………」

そこで言葉が詰まる。

そういえば、平然と歩いているが、私の家はどこなのだろう。そもそも、平然と歩いていると言ったが、一体どこを目指しているのだろうか。

自分のことがまるで分からない。記憶喪失というのはホントに気持ちが悪いです。

「そのうちわかりますよ。」

誤魔化すように、とびきりの笑顔でそう言うとは「おっおう……………」と顔をそらすのを見てこちらも恥ずかしくなった。ホントにバカでしょ私。

「……………そういえば、比企谷くんの家は？ついてきてもらうのは助かるんだけど、遠回りになってない？」

「いや、俺も同じ方角だから気にしなくていいぞ。」

……………

「なあ橙山、変なこと聞くけど、実は俺の家知ってたりしないか？」

「え、知らないよ？そもそも会ったのも今日が初めて……………だよね

「？」

「いやそうなんだが……まあいつか。」

……

「なあ橙山、実は俺の家の座敷童子だったりするか？」

「いやごめん、何言ってるのか分からないかな……」

「すまん、忘れてくれ……」

……

……

私はある一軒家の前で足を止めた。いや、止まったと言うべきか。恐らくここが私の家なんだろう。家族はいるのだろうか、とりあえずお礼を言わなければ、

「送ってくれてありがとうございました比企谷くん。私の家ここだから、じゃあまたねっ」

「……あー、いやその……」

先ほどから様子がおかしい。私と離れたくないのだろうか。まさかほんとに好きなのでは……!?

「……えっと、そこ俺の家なんだけど……」

焦りと不安での脳内エラー

しくじった、

しくじった、

なんてことだ、

自分の直感など信じるんじゃないやなかった。

自分の家だと思い込んでいたところがまさか彼の家だったなんてどうする？

今のは冗談だよ、なんて嘘は誰にでもバレる。

……いつそ自分の今の状況を話そうか……

いやダメだ、優しいとはいえ知り合ってまだ数時間しか経ってない相手だ。

記憶喪失なんだよ、なんて急に言われた方はどうなる。

彼ならば心配してくれるのだろうか……

だが結局迷惑をかけていることには変わりはない。

どうする、

どうする、

今回直感が間違っていたことは、かなり深刻な現実を私に突きつける。

つまり現状、私には帰る家がないという事だ。

記憶が無いというよりも厳しい結果に不安が高まる。

ダメだ、全然頭が回らない。

今ちゃんと呼吸出来ているだろうか。

胸が苦しい

怖い
怖い

ここに来てやっと、と言うべきか、
自分の現状にとてつもない不安を感じる。

「……………橙山？大丈夫か？」

……………今も、私のことを心配してくれているんだね…
無論、心から信用出来ている訳では無い。
しかし、

その優しさが嘘偽りの無いものだということは、彼のその腐った目
が教えてくれた。

ここまで来たんだ。

誰かに話せば楽になるのではないか？

一人はいい。誰にも迷惑をかけずにすむし、被害を受けることもな
い。

それは、私の一つの理念だ。

けれど、一人で出来ることに制限があるのもまた事実。

本来であれば即病院行きであろうこの状態で、むしろ私は一人で
きる最大の対応をしてきたのではないか？

解決しなくてもいい。この不安感を今はどうにかしたい。

全く……………ただ頼るだけにこれだけの言い訳を並べないといけな
いとは……………筋金入りのボツチだね私は…

彼なら、比企谷くんなら、力になってくれるよね…………

初対面同然の人に、私は過度な期待を抱き、

彼の優しさに甘え——

『甘えるな！誰も貴女なんて救いはしない。』

「……………だ……………れ……………?」

「おい橙山？お前ホントに大丈夫なのか？待ってる、念のため救急車を——

「それはダメ!!」

「!？」

「あつ……………ちがつ……………、今のはその……」

頭の整理が追い付かない。

なんだ今のは

咄嗟に誰？と言ってしまったが、ホントに他人なのか？

過去の自分のセリフではないのか？

それとも家族？友達？

——ガチャ

それは、記憶のない私でもわかる音だ。

扉が開いた音がした。

もちろん比企谷家の扉だ。

そしてその音がまた私を焦らせる。

「おにーちゃん！帰ってくるのが遅いよ!!もー小町お腹ぺこぺ……………こりん?」

不安と恐怖で目に涙がたまり、顔がよく見えない。

だれだ？

女性の声だ。

私を見て言葉が止まったのだろうか。

それよりも、私のせいで彼が怒られている。

「ちつ、違うの！彼はその……………私のせいで遅れただけだから！だから彼は悪くなくて……………悪いのは私で……」

今出来る限りの弁解をする。

しなくてどうする。お前にはする義務があるだろ橙山冬華。お願い、わかって。彼は悪くない……………せめてそれだけでも……!

「ほよよ〜？もしかして冬華さんですか？」

「……………え？」

慣れない呼び方に、私は腑抜けた声を出してしまった。

こうして彼女の1日が終わる

「待つてましたよ冬華さん！今お迎えに行くつもりだったんですが、お兄ちゃんが先に行つてたとは。さつすがお兄ちゃん、気だけは利くね！」

…待つていた？

予想外の展開に頭が追いつかない。

誰？とか、知り合いだつたとしても、何しに来たの？とか、そのようなことを言つてきたのならまだわかる。

それなのに、待つていた？

どちらにせよ私の家ではなかった。

だが、理由はわからないが向こうは私を歓迎してくれているようだ。しかし、ここで下手なことを言つては全てが台無しだ。今は冷静になり、彼らの会話から私についての情報を少しでも得るように専念しよう。

「え、何それ俺全然知らないんだけど。」

おっと、いきなり詰んだかもしれない。

「もー！メールしたでしょう？お兄ちゃんの携帯には滅多にメールなんて来ないんだから、すぐ気づくと思つただけだ。」

さらつと悲しいこと言うんだね妹さん。

天然小悪魔を実際に見たのは初めてかもしれない。いや覚えてないけど。

「いやいや小町ちゃん？お兄ちゃんにもメールなら沢山くるからね？欲求不満の人妻さんとか、遺産が有り余つて誰かに譲りたい人とか、早く結婚したいと思つてる女教師とか！」

それ典型的なイタズラメールだから。最後の先生に関しては可哀想なので早く誰か貰つてあげてください。

「それ全部イタズラメールじゃん!!せつかく小町がメールしたんだから、今確認すること！」

やめて！先生の分までイタズラに含むのはやめてあげて！

「はあ…わーっただよ……………??……………っ！」

携帯の画面を見た比企谷くんは、何故か急に驚いた表情を見せた。そんなに凄いメールだったのかな…？ちよつと気にな…私、気になります！

「悪い小町、携帯電池切れてたわ。すまん、どんな内容だったか教えてくれ。」

…あれは電池が切れていたから驚いたのかな？いやもう気になりますは言わないけど。

「しよーがないな。『親戚』の冬華さんが家に泊まることになったから、小町がお迎えに行つてくるねってメールしたの！」

…！

…きた、私についての手がかり…！私は比企谷家の親戚の人…なるほど、だから私は直感的にここへ来たのか…

これはかなり有益な情報だ。もっと、もっと何か…

「まあとりあえず、冬華さん、ここまで来るのに結構な長旅だったと思います。ここを自分の家だと思ってゆっくり休んでくださいねっ！」

と、妹さんは私に話を振ってきた。

ここは流れに乗っておこう。なるべく自然に…疑われないように…

「うんっ、ありがとう小町さん。そこまで疲れなかったけど、お言葉に甘えさせてもらうね。」

嘘です、かなり疲れました…

今のは自然に出来ただろうか、さん付けにしたけどいつもはどうなんだろう…まあそれよりも早く休もう。

今は得た情報の整理と今後の方針について――

「…すまん、ちよつといいか橙山。」

「ひゃっ!？」

…また変な声を出してしまった…

完全に油断してたな私…比企谷くんの存在を忘れてたよ…ミス

ディレクション上手いなあ比企谷くんは。幻の六人目？

いやでも今のは比企谷くんが悪いよー！急に話しかけられて心臓
出ちやいそうだったよお…

「なっ、何かな…？」

「…あーその…：…なんだ…」

そう言いながら彼は私に一步二歩と近づいてきた。

え、何その真剣な眼差しは…？

ちよつと待って、まだ出会ったばかりだよ私達？

いつ妹さんがいる前で…比企谷くんって意外と大胆な――

「…：…ダウト。」

「…：…え？」

* * * * *

今私は、比企谷家のリビングで座っています。

もつと言うと正座しています。

別に強制されてるわけではありませんが、なんか自然になってしま
いました。

では何故こうなっているかと言いますと、

「ではでは、〃初めまして〃冬華さん！比企谷小町です。今日は兄と
放課後デートしてくださいだったみたいで、ありがとうございます！」

ニヤニヤと自己紹介しているのは比企谷くんの妹の小町さん。何
故自己紹介なんてしているのか、と言うと、簡単な話、私たちは〃初
対面〃だからである。

「…いついやーそんな、デートだなんて、書店でたまたま会っただけだよお……」

こここのところ、腑抜けた返事しかしてないような気がするんですけど…

まあ、仕方ないよね。色々としてやられたようだから。

「すまん橙山、結果として騙すような形になっちゃった。」

「…ううん、全然大丈夫だよ。むしろちよつとホツとしてるくらい。あんまり自分から頼るのが得意じゃなくて…へへ…」

我ながら情けない話だな…。

しかも、この発言も厳密には嘘になる。

得意じゃないから頼らなかつたわけではない。

しかし、今はあの現象については話さなかつた。

さて、ここで一度整理をしよう。

彼の言った「騙す」というのは、玄関先でのことだ。

彼はメールで妹に、私を親戚であるかのように振舞ってくれと頼んでいたらしい。

『本屋で財布の中身を把握出来ていなかったし、自分の家すらわからない、となれば、今の橙山の状況はだいたい予想できた。』

と、彼は言っていた。それだけでホントにわかつたのですか？と尋ねたところ、「まあ、その前から少しだけ情報をもらってたんだがな…」と、これ以上の詳しい説明はしなかつた。

そして、これは数分前のこと、

私と比企谷くん、小町さんの3人は、リビングで話し合おうということになったのだ。

「お節介をかけたいわけじゃないが、病院にはどうしても行きたくないようだし。それに直感的にここへ来たってことは、もしかしたら俺たちに関係あることかもしれないからな。」

「そうだねえ、お兄ちゃんは普通にしても反感を買われそうだもんね。」

「今そんな話はしてないからね小町ちゃん？」

ホントに仲が良いなこの兄妹は……。実は人生相談とかしてたりして：それはないか。

そんなことを思っていると、比企谷くんは一つ咳払いをして、小町さんがはっ、と言うと話を進めた

「橙山さん、小町達は無理に深入りしようとは考えてません。けどもし困ってるなら、小町達は力になりますよ！」

ここまで良い人だと逆に深く疑ってしまう……

何をか、というと、

「……………私たち、初対面なんだよね？なんでそこまで私のために……？」

これはボツチでなくても思う疑問だろう。

なんの捻りもない、率直な疑問だ。

「その、実はですね、今家に両親がいないのはお気づきでしたか？」

「あ、うん。玄関に靴がなかったからもしかして、とは思ってたよ。」

「昨日から数日間家を離れるらしいんですけど……」

そう言う和小町さんは比企谷くんと目を合わせた。

「昨日の朝から出ていったんだが、その日の夜に親父からメールが来てな。いつもは小町の方に送ってくるから珍しいと思って見たら、またその内容もおかしくて。」

そう言う和小町さんは、彼は電池が切れていた、という携帯を取り出して、平然と電源をつけメールを私に見せてきた。

【もし俺達が不在の間に、雪のヘアピンをつけてる女性が家に訪れたら、数日間面倒を見てやってくれ。】

……………

……………自然と頭を触っていた。

そして、このメールを見て、初めて私がヘアピンをしていることに気づいた。

* * * * *

そして現在、

あれだけ一人で頑張ろうとしていた私の精神に限界が来たのか、30分ほど私は自分の現状について彼らに話した。

今回は不思議とあの声が聞こえなかった。

やはり偶発的なものなのだろうか。

色々話し合った後、小町さんの「この女性が冬華さんなのはほぼ確実!!とりあえず一晩泊まっていてください!」という提案から、

結局、一晩泊めてもらうことになった。

そして比企谷くんの「話だけ聞いてると、お前今かなり頭の中ぐちゃぐちゃになってるだろ。とりあえず具体的な話はまた今度にして、今日はもう休んだほうがいい。」

と、言う意味であろう提案から、小町さんが部屋を貸してくれて1人になる時間をくれた。

記憶が戻ったらちゃんとお礼しないとな……

明日になったら記憶が戻ってるなんて事があればいいのだが……

そういえば、小町さんはどこで寝てるのかな……

比企谷くんの部屋へいったのかな……

明日も学校だな……

そういえば、部活に入ったんだ……

なんだっけな……

今はもう、いいや……

私は今日、初めて考えることをやめたのだった。

朝から部活があるのは運動部だけではない

「おはようございます。」

記憶がない橙山冬華？初めての朝の挨拶。ぐっすり眠れたおかげが、笑顔で挨拶が出来るまでには精神が落ち着いたようだ。私に、自分の枕じゃないと眠れない、みたいな性質がなくてホントに助かった。

さて、今は午前6時30分。割と学校まで距離が近い電車通学の人や、少し距離のある自転車通学の人ならだいたい起きるような時間だろう。知らないけど。

しかし、それも土曜日となると起きる人は減るのではないだろうか。では何故こんな時間に起きるのかというと、

【夜分遅くに失礼します。部長の雪ノ下雪乃です。明日は土曜日ですが部活がありますので、8時30分に部室に集合してください。(22:20)】

無論私の携帯にも同じメールが届いていたが、この時間だと私が熟睡したあとだったので、メールを見たのは朝起きてからだ。加えてここで一つ訂正しておこうと思う。私は先ほど起きた、と言ったが、正確には起こされた、のである。

「おっはよーですよ冬華さん！」

そう言って挨拶を返してくれたのは部屋を提供してくれた小町さん。そして私を起こした人でもある。誤解しないで欲しいのは、私は起こされたことに関して全く怒っていないし、むしろ感謝している。

どうやらあのメールは小町さんの方にも届いていたようだ。そして私も部員であることも書かれていたらしく、ご丁寧を起こしてくれたというわけだ。

「もう少し寝かせてあげたかったです、冬華さんも部員ということですので一応起こしたんですが、調子が悪かったら、小町から連絡しておきますよ?。」

「ううん、大丈夫だよ。ごめんね小町さん。朝ごはんまで用意してもらって。」

「いえいえ！いつもと作る量は変わってないので全然問題ないですよ！それよりも…」

そう言つて小町さんは2階の方を見つめた。まだ起きてこないお兄ちゃんをどうしようかと迷っているのだろうか。

「あの……起こしてこようか？」

「あ、別にそういうつもりじゃ……！まーけど、すいません、お願いしてもいいですか？」

「うん、小町さんの部屋の隣だよね。」

「はい！あ、起きなかつたら耳元で名前を囁いてください。多分すぐ起きますので。」

「うん！わかっ………つてええ!?ささやくって……いつもそうしてるの?!」

「小町がやつても意味ありませんよー。冬華さんがやるから効果バツグンなんですっ！」

「まあ………最終手段として……ね？」

小町さんは「わっかりました〜♪」とニヤニヤしたまま料理を続けた。あれだね、割と凄いいこと言う子なんだね小町さん。こういう方面に関しては誰よりも優れてそうだよ……囁くって……そういうこと普通に勧めてくるんだから恐ろしい子だわ……

しかし、せつかくの休日、ゆつくり寝かせてるあげてもいいのではないだろうか。彼も昨日は私のせいで疲れただろうし、自分から言つたとはいえ少し気が引けるなあ……

とまあそんなことを思いながら躊躇なく彼の部屋の扉を開けたのだった。

………そういえば、男の人の部屋に入るのってこれが初めてじゃない？

………

………うわ……

………どうしよう……

………やばい……

全然緊張しない。

「……………zzz」

どうやらまだ眠っているようだ。

やはり休日は昼まで寝るに限るよね。

「比企谷くん、朝ですよ。ほら、起きてください。」

美少女から起こされるとか、全国の男子の憧れのシチュエーションじゃないのかなごめんなさい調子に乗りました。

「……………うう……………あと10分…」

……………寝かせて上げたい……………けど起こさないといけないってことは用事があるんだよねきつと。

「ほら、そんな事言わずに。起きてください。」

「……………あと5分……………あと5分で諦めてくれ……………」

それ起こしに来た意味ないんですけど……………。さっきの10分から諦めるまでの時間減らしちゃったよこの人。

……………やるしかないのか……………

すう……………はあ……………

「……………八幡。」

「うおい!?!」

「ひゃつ!?!」

予想以上の反応に想定外の反応をしてしまった……………恥ずかしい

よお……………

「え……………あれ?……………橙山?…」

「うん……………橙山?だよ?」

「えっと……………おはようございます?…」

「あつ、うん。おはようございます?…」

なんだよこの会話。

疑問形だけで会話成り立たせるとか現国の先生怒っちゃうよ。誰かは知らないけど。

「あの……朝ごはん、できますよ?」

「おっおお……きつ、着替えてから行くわ……」

「うっ、うん……そう言つとく。」

そう言つて彼の部屋を後にした。

ロストメモリー冬華、最初の黒歴史が刻まれた瞬間であった。

* * * * *

朝食を済ませた私たちは、休日出勤というなの部活のため、学校へ向かっていた。小町さんは後から行くらしく、現在比企谷くんの自転車で2人乗り中。良い子は真似しちゃダメだゾ☆

男の子と2人乗り……縮まる距離、揺れる度に触れ合う体、そしていつしかそれは恋心に……

なんてものは皆無だ。

ここに来て一つ気づいたのは、私も、そして恐らく彼も、そういった事に関してはあまり積極的ではないという事だ。興味がない訳では無いが、喉から手が出るほど欲しいという訳では無い。

彼の場合、欲しいものは、多分もつと不確かな——

「橙山、そろそろ着くからこの辺で降りてくれ。」

「え? ああ、うん。わかった。」

そう言われて降りると、「自転車停めてから行くから、もう先行つてくれてもいいぞ。」と言われたが、ここまで来てそれもなんか気持ち悪い感じがしたので、彼を待ち、2人で学校へ行くことにした。

「そういや、転校早々部活に入るとか、結構積極的なんだな、橙山。」

「まあ入ったのは事実んだけど……半ば強制というか……つてあれ? 私転校したつて言つたっけ?」

気付いたら学校にいたとは昨日説明したが、私が転校生であるとは小町さんにも言っていない。けどメールに私が転校生って書いてあったのかも…………

「あー…………、ちよつと生徒指導の先生にたまたま聞いたんだよ。」

「生徒指導の先生って…………平塚先生、だよね？」

「お、なんだ、知ってたのか。」

「うん、というか、そもそもその人のせいで部活に入ることになったんだけどね…………ははは…………」

全く、笑い話にもならない。人格に問題があるから部活に入れられましたって、ちよつと言って後悔しちやったかも。

…………あれ、返事が来ない。

「…………比企谷くん？」

「…………そつ、そうか…………その、お疲れさん…………」

そこまで驚いた話なのだろうか？

まあ確かに、こんな人多分他にはいないもんね。

「じゃあ、比企谷くん、送ってくれてありがとねっ！もう大丈夫だよ。」

さて、ここからが勝負だ。とりあえず今日で私の印象を最悪にする。あわよくば今日で退部する…………！

「あー、その…………俺も多分…………いや確実に行き先は同じだから。最後まで付いて行くぞ…………」

…………確実に同じ行き先？

どういう事だろうか…………

そして、そんな疑問にならないような疑問を抱き、昨日同様共に行動するのであった。

「ねえ、比企谷くん。比企谷くんって運動部？」

「…………まあ、運動部並には疲れるかな。」

…………

「ねえ、比企谷くん、比企谷くんは自分から部活に入ったの？」
「……………ノーコメント。」

……………

「ねえ、比企谷くん、その部活って部長は冷徹美少女だったりする？」
「そこまでできたら聞く必要あるの？」

そう、もう分かりきったことだった。

なるほど、部員は小町さんの方だと思っただけど……………実際は……………

——ガラガラ

「あ、ヒツキー遅い！集合時間過ぎてるよ?!」

「うっせ、正義は遅れてくるのが鉄板だろうが。」

「あなたのことを正義というのなら、この世はもう終わりね。」

「世界レベルで巻き込むとか、俺マジカリスマ性やばいわ。」

「ねえゆきのん、ヒツキーの隣にいる女の子って……………」

「ええ、さつき説明した新しい入部者よ。」

「うわー、すっごい綺麗だねっ!」

「ところで、何故2人が一緒にきたのか……………説明してくれないかしら
比企谷くん?」

「お前笑顔の使いどころ毎度毎度間違えてるからね?っーか俺限定か
よ。」

「当たり前よ。そもそも私からの——

……………まず、一つ気づいたのは、

男女比おかしいでしょ……………

こうして、私の部活動が始まった。

とある友人の恋文（ラブレター） ①

「あ、そう言えば自己紹介まだだったねっ！」

雪ノ下さんと比企谷くんが何やら言い合っているとき、私に話しかけてきたのは今日初めて会った女の子だった。

「あっ、うん。そうだったね、えっと…橙山冬華？です。よろしくお願ひしますね。」

またしても疑問形…、何回言っても慣れないなあ。

それにしても、入学や転校してからの数日間での自己紹介の機会の多さはさすがに参ってしまう。目立つことが苦手なタイプにとって自己紹介は学校イベントではトップレベルで嫌いなことだと思う。

例えばどんなに暗い人でも、どんなに地味な人でも、その瞬間は全員の見線が自分に集中するからだ。しかもその行為が、授業が始まると各教科担当の先生に1回必ずしないといけないから最低6・7回は皆の見線が集まるという事だ。

……全く、何故転校などしたのだろうか私は…

「私は由比ヶ浜結衣だよ、よろしくねっ冬華ちゃん！」

由比ヶ浜さん、か。

どうやらこの人は雪ノ下さんや比企谷くんとは違って普通の高校生といった印象だ。

「あの……由比ヶ浜さん、今日はなんで朝から集合したのかな？」

比企谷くんと雪ノ下さんに聞こうとしたが、あの2人はまだ何か言い合っている。由比ヶ浜さんがそれにあまり触れないことから日常的にやっている事だと予想できる。少し羨ましい関係性だなあ…

……羨ましい？

「あーそれ！なんかね、依頼があったとかで休みだけど部活あるってゆきのんからメールあって。そういえば冬華ちゃんの連絡先聞いてなかったね、交換しよう！」

「え、あっ、うん。ちよっと待ってね…今携帯を…」

この人は人付き合いに長けてるなあ。

私はあまり人と群れることは好まない。上辺だけの人付き合いなどまっぴら御免だからね。

しかし、メールでのやり取りなどに関しては別に嫌いではない。情報の共有は大切だと思うし、何よりスルーしても何も問題ないからだ。そして恐らく…

「ねえ、由比ヶ浜さんは、比企谷くん連絡先も知ってるの?」

「ふえ? ヒツキーの? うん、知ってるよ。でもその時ヒツキー、普通に私に携帯渡してきたんだよ! 私ビツクリしちゃった。」

やっぱり、比企谷くんも同じ考えだったようだ。

こんな唐突な質問でも笑顔で答えてくるあたり、雪ノ下さんと同じくらいモテてそうだね由比ヶ浜さんは。

あと、さつきからあだ名のセンスが酷い……

「さて、挨拶はすんだかしら。」

そう言った雪ノ下さんは何やら満足気な表情だった。

あー…比企谷くん……お疲れ様。

「はあ……つーか、俺なんも聞いてないんだけど。」

「ええ、だって言ってないもの。」

流石は雪ノ下さん、ある意味抜かりないですね。

「あれ? 私メールしたよねヒツキー。」

「え? ああ、あれお前だったのか。スパムメールの差出人かと思ってた。」

「何それヒツキー酷い!」

比企谷くんさすがに酷いよ……いくら何でも間違えるわけ…

【♡?..∞♡ゆい♡?..∞♡】

スパムメールの差出人にしか見えない?!

「おつ、集まってるな。もう橙山との挨拶はすんだかね?」

そう言うのとノックなしで平塚先生が入ってきた。

案の定雪ノ下さんに「先生、ノックを…」と言われてきたが、すまんすまんと適当に流し、話を進めた。

「休日だと言うのにすまないね。橙山も、転校してきたばかりだと言

うのに、来てもらって助かるよ。」

今思えば、来なかつた方が悪印象を与えることが出来たのではないかと少しばかり悔やんだが、まあここからいくらでもやりようはあるだろう。今は目先のことに集中しなければ。

「いえ、問題ありませんよ。部員揃って挨拶できるいい機会なので。それよりも、今回は依頼？があつたようですが、」

そう言うと、先生は「入ってきたまえ」と恐らく依頼者であろう人をこの部屋に呼んだ。イマイチよく分からないところもあるが、一応ここは相談室のようなものだ、来る人もそれなりの悩みを持っていることだろう。現在進行形で自分のことで悩んでいる私には悩むことの辛さが嫌でもわかつていた。転校早々に休日出勤させられたとはいえ、こちらの事情で相手に不快な思いをさせるわけにはいかない。人付き合いが嫌いではあるが、それはそれ。部活動中なのだから、ここは切り替えて、相手に真摯な態度で――

「せんぱーい！お久しぶりです〜♪」

悩んで……辛いはず……だから……

「おっおお、なんだよ……一色か……はあ……」

「なんですかその反応は！さすがに酷すぎませんか?！」

依頼者はぶく〜と頬をふくらませ比企谷くんに怒っていたが……

さすがの私も比企谷くんの反応に賛同してしまった……。え、いやだって休日に相談しにくるってよっぽどのことだと思つたから……とりあえずさっきの私の良心返してくださいマジで。

「おつと、そちらの人は初めましてですね、生徒会長の一色いろはですっ！よろしくお願ひしますね♪」

「あ、うん。橙山冬華？です。よろしくね一色さん」

「転校生だそうで。分からないことがあればバンバン聞いてくださいねっ！先輩に！」

とりあえずあなたが生徒会長になった経緯とかそのへんのことを聞きたいねホントに。

「いやお前が聞いてやれよ生徒会長。」

「え、でもなったのは無理矢理っていうかあ、半ば、というか全般的に先輩のせいっていうかあ」

「橙山、なんでも聞いてくれ。」

「なんという脅し!?あの比企谷くんが後輩に負けるとは…」

「そつ、それじゃあ、依頼について聞きたい、かな?」

「とりあえず話を進めたかったので、少し強引に依頼の方へ話題を変えた。」

「あ、そうですね。といつても、正確に言うと、私の依頼じゃないんですけど……」

「え、お前のことじゃねえのか?」

「はい、実はですね——」

* * * * *

「「ラブレター?」」

私含め女子3人が声を揃えた。

「はい、私のクラスメイトがですね、好きな人ができたーって言ったので、じゃあ告白するの?とちよつと軽い感じで聞いたんですよ。まあ緊張しちゃうから無理って言っちゃいましたけど…で、ラブレターでも書いたらいいんじゃない?って言ったらですね……」

「本当に書いてきちゃったんだね。その子。」

段々と声が弱々しくなってきた一色さんに気づいて、由比ヶ浜さんが代わりに結論を言った。

「そのラブレターを代わりに渡してほしい、という依頼かしら?ごめんなさい、そういうことであれば協力は出来ないわ。」

「……………」

比企谷くんは黙ったままだ。しかし、断ることはない賛成なのだが、何か恋愛絡みであったのだろうか。由比ヶ浜さんもそれに反対することなく申し訳なさそうな顔をしていた。まあ、あまり深くは入るつもりは無いが少し気になる。

「あ、いえ。そうではなくてですね。ラブレターのことを言ったのは私ですし、代わりに私が出したんですよ。」

「へー！それでそれで！どうなったの!?!」

さつきまでとは急変して、由比ヶ浜さんが興味津々になっていた。やっぱり女子は好きなんですネこういう話。いや私も女子だけど。

「えくつと……それがですね……」

……どうやらここからが本題のようだ。それに気づいた由比ヶ浜さん以外の人は一色さんの話に集中した。

「……手紙が渡せてなかったんですよ。」

「「えっ。」」

やっと問題点を知った時には、すでに紅茶が冷めてしまっていた。

とある友人の恋文（ラブレター） ②

毎日が同じ日だと感じる

こんなつまらないことを思い始めたのは何時頃だったか

「あなたのことが好きです、僕と付き合ってください。」

平日の昼時に響く男子の声。

体育館裏に手紙で呼び出して告白するというテンプレ要素しかないこの状況。

もう慣れた。

初めは嬉しいという気持ちもあった。

今では迷惑でしかない。

呼び出されるのも面倒になり、教室でさっさとしてくれと思うほどになった。

「ごめんなさい。」

そう言って去ろうとした。去りたかった。

早く教室に戻ってやることがあるから。

「まっ、待ってくれ！理由だけ聞きたい！なんでダメなんだ？それを聞かないと諦めようにも諦められない！」

またこのセリフ、

断れば決まって皆理由を聞きたがる。

放っておいてほしいのに

「……今は誰とも付き合う気がないから。」

考え抜いた上で出たのがこれ。

この前は正直に言ったら酷いことになったからなあ……

頼むからもうこれで納得して——

「だったら、君が僕を好きになってくれるように頑張るから！だから付き合ってくれないか？」

……………

「そういうのいいから。」

私は思わず少しだけ本心を出してしまった

ああ、またやってしまった。

何度も気をつけているのに。

もうどうでも良くなってきた。

何故こんなことになってしまったんだ

私は悪くない。

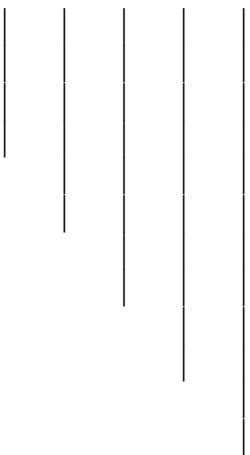
あの男子が告白したのは「彼女」であって私ではない。

女子たちが嫉妬してるのは「彼女」であって私ではない。

そうだ、

私は悪くない。

全て「彼女」が悪いんだ



* * * * *

「もう少し、詳しくお願いしてもいいかしら?」

一色さんからの発言に対して、雪ノ下さんが、恐らくこの場にいる人たち全員の要望を代弁してくれた。

「はっ、はい。えっとお…気になることを質問してもらってもいいですかね?ちよつと上手くまとめられないっていうか、」

「あつ!ちよつと待ってね…はい!いいよ。」

どうやら由比ヶ浜さんはメモを取る準備をしたようだ。やはりこういう機転はきくらしい。

「では初めに私からいくつか質問するわね。ではまず――

《 ☆ 今回の依頼のメモ (o・ー・) ☆ 》

・ラブレター♡はいろはちゃんが代わりに渡したっ!

・相手は隼人くんっ!

・ラブレターを入れた場所は、まなみんと話しあってクラブバックにしたらしいフム (☒ ω ☒ *) フム

・次の日に確認したらもう無くなっていた!?! 》

顔文字やらなんやらで読みにくいのが、ちゃんと由比ヶ浜さんは要点をメモできているようだった。

私としては、渡した相手を確認するのは難関だと思っていたのだが、隼人くんという人物であることはすぐに判明した。というのも……

『ちなみに相手は誰なのかしら?』

『えっと、サッカー部の――』

『もういいわ、ありがとう。』

『はやっ!?!』

余程の人気者なのだろうか。

余談だが、試しに私が雪ノ下さんに「雪ノ下さんは隼人くんって人が好きなの?」と聞いたら必中の絶対零度をくれました。まる

ところでメモ中にあつた、まなみんという人物、この子が今回のラブレターを書いた人だ。

フルネームは七宮 麻奈美 《 ななみや まなみ 》

一色さんとクラスは違うが同じ中学校出身でこの場にいる女子たちに並ぶほどの美少女らしい。

しかし、一色さん曰く、少し変わっているところがあるとのこと。ここにいないことを考慮すると、極度に内気な女の子なのだろうか……。そんな予想を立てていると一色さんが七宮さんについて詳しく

説明した。

「私と初めて話す時に、『あなたは赤なんだね』って言ってきたんですよ。」

「え？赤って……色がってこと？でもなんで？」

「私もそのとき全然分からなかったんですけど、なんか色が見えるらしいんですよ。」

「えー！なんかオーラの的なやつが見えるの?!すごいねその子！でもそんなことってホントにあるんだね。」

確かに、一見マンガやアニメで無いかぎり有り得えない話だが、今回に限ってはありえることである。

ごく稀な例だが、本当に見えているとしたら……

「共感覚、シナスタジアの持ち主なのかもしれないわ。」

雪ノ下さんも知っていたんだ。さすが首席ですね。

「絶対音感の人のほとんどが“色聴”と言われる共感覚を持っていると言われているわ。幼い頃、ある音楽家のパーティーに参加したとき、音を聞くと色を感じるという話を聞いたことがあるけど、色が“見える”なんてホントに珍しいわね。」

共感覚で最も多いのが“色聴”と言われる、雪ノ下さんが言ったものである。過去の共感覚を持っていた人物として有名なのは、画家のダヴィンチ、ムンク、指揮者のフランツ・リスト、特にこの人は、演奏中に「ここは紫で」と演奏者に指示し困惑させた話は有名だ。

しかし、どの偉人たちにも、人を見ると色が見えるなんて人の例はないと言っていないだろう。

「まあ、普通に良い子なんで、そのへんはあんまり気にしてないんですけどね。」

「……………そう、それは良かったわ…本当に。」

「……………？」

一色さんと由比ヶ浜さんは、雪ノ下さんの反応に対して不思議な表情を浮かべているが、雪ノ下さんが安心した理由はよくわかる。

共感覚は確かに未知の能力であり、常人よりも special な力ではあるが、特別 (special) と異常 (special) は紙

一重という事だ。

特別なら確実に名前が刻まれるような偉人になることだろう。

しかし、異常なら話は別だ。一般人が続べるこの世界で、かけ離れた能力を持った人間がこの世間に適応するのはとても難しい。残念なことには、適応できずに自ら命を落とす例も少なくない。

何故ならば、共感覚は無意識に起こる。

それがどれだけ辛いことか、常人には到底想像もつかない。

ましてや七宮さんの場合、見ると色が見える共感覚。色、とはその人の本質のことだろう。欺瞞に満ちた世界で全ての本質を見抜いてしまうのだから、精神の負荷は相当なものだ。

それでも、一色さんのような友人がいる。

その事實は、少なからず七宮さんの心の支えになっていることに違いない。

「やはり、一度本人と話がしたいわ。一色さん、今日七宮さんは来ているのかしら?。」

「はい、いつも休日は学校で勉強してるみたいですから、恐らく教室か図書室に。」

「では二手に別れましょう。橙山さんは転校してきたばかりだから、校舎に慣れるために一色さんと同行してもらおうわね。」

「それはいいんですけど……え、二手?。」

まだ何かやることがあったのだろうか……

「はあ……私と由比ヶ浜さんは、いつの間にか消えたステルス谷君を探してくるわ。」

……………

「「いつの間か?!」」

* * * * *

雪ノ下さんに言われた通り、二手に分かれたあと、今度は一色さんの案で私が図書室へ、一色さんが1年生の教室へと、再び二手に分かれることになった。その際連絡ができるようにと連絡先を交換した。ピロン、と携帯がなったので見てみると早速一色さんからのメールが来た。

『初メールです！あ、麻奈美の写真まだ見せてませんでしたね。貼付しておくので、確認よろしくですっ♪』

にしても、一色さんも珍しい携帯だったなあ…

そんなどうでもいいことを思いながら写真を確認した。なんとうか、類は友を呼ぶ、とはよく言ったものだ。一色さんの友人というだけあってとても可愛らしい女の子だった。

そしてどうやら、私の方が当たったようだ。

写真に写っている可愛い少女を、図書室で発見した。

………あんまり初対面の人に話しかけるの嫌なんだよなあ。

変な声とか出たらどうしよ…

「……えっと、ちよつといいかな？七宮麻奈美さん、だよね？」

よし！ちゃんと言えたZE！…なんだこのテンション

「!?……………」

七宮さんは一瞬驚いて、私のことを凝視していた。

あれ、惚れた？私の美しさに惚れちゃった？ヤダ私ったら罪な女…

何でもないですなんか色々すいません

しかし、見つめたまま返事が来ない……

……今まさに私の“色”を見ているのか？

「……あの〜」

「……あつ、ごめんなさい！私に何の御用でしょうか？」

静けさに我慢出来なくなった私は再度声をかけ、七宮さんは慌てて返事をした。

「私、奉仕部員の橙山冬華？という者です。その、ラブレターの件について部長さんが直接お話がしたいって言うんですけど、今時間大丈夫？」

「……あつ、奉仕部の方でしたか。はい、大丈夫ですよ。私こそ直接お伺いせずにすいませんでした。」

「いや、全然大丈夫だよ。こういう話は直接言い難いもんね。じゃあ、ついてきてもらえる？」

「はい、宜しくお願いします……！」

ふつ、我ながら神対応ですわ。

何このコミュ力の高さ、全国のボッチさんに謝らないといけないねこれは。

しかし、七宮さんも礼儀正しい人だなあ。一色さんが良い人っていうのも頷ける。

一緒に歩き始めてから少しして、七宮さんが私に話しかけてきた。

「あの、いろはから私のこと、どのくらい聞いてますか？」

「え？あー…その、色が見えるって話は聞いちゃった。…ごめん、あんまり知られなくなかったよね…」

「いいいえーそれは全然いいんですよ。むしろ、知った上でご親身に接してくれることに嬉しく思っています。」

なんだこの天使は。

さつき私に惚れた？とか思ってた自分を殴りたい…

「…ちよつと疑うように悪いんだけど、その話ってホントなの？」

うう…：あんまり聞きたくないんだけどなあ、やはり本人から言ってもらった方が信びよう性あるしなあ…

「疑うのも無理はありません。こんな話、大概の人は鼻で笑って流しますから。けど、そうですね、それでも私は本当に見える、と言うしかありません。」

彼女は苦笑いしながらそう語った。

今言ったことが、どれだけの体験をした上で言ったのか、想像するだけで涙が出そうだった。

「あ、でもあの話には少し補足しないといけない部分があるんですよ。」

「え? そうなの? ……それは、聞いてもいいのかな?」

「はい、相談をさせてもらってるのは私の方ですし、何も問題ありませんよ?」

彼女は優しい笑顔でそう言う。

「実は、色が見えるのは初対面の人限定なんですよ。なので、話したことの有人からはもう何も見えないんですよね。」

「へえ、じゃあ一色さんのも見えないんだね。」

「はい、そうなりますね。」

恐らく、彼女の共感覚は一種の防衛反応なのだろう。

見知らぬ人が自分にとって脅威になるかどうかを視覚化されたのが色、という事か。

「そういえば、一色さんは赤色だつて聞いたんだけど。」

「はい、あの時のことはよく覚えています。私が初めて心を許した相手なので。」

嬉しそうに微笑んだ。

ちよつと…この子と話すと涙腺が崩壊しそうなんですけど…。ホントにいい子だなあ…お持ち帰りしたいよお…あ、家がねえわ。

「けどまあ……」

「?」

初めて七宮さんは私に暗い表情を見せた。

「今のいろはは、赤じゃない赤、ですね。」

どういう事だ……?」

視覚化されず、イメージで赤を感じるといふことだろうか…

「そつ、そういえば、私の色は見たの?! 図書室で初めて会ったとき凝視してたけど、何色だった?」

彼女の暗い表情をあまり見たくなかつたので、慌てて私は話題を変えた。

「えっと、橙山先輩は……………その、」

珍しくも答えを鈍らせる七宮さん。

やっとの事で返ってきたその答えは私の予想していなかった答えだった。

そして、この答えから、私はまた自分についての疑問が増えたのだった。

「……………何も見えなかったんですよ。」

とある友人の恋文（ラブレター） ③

「あの、依頼人を連れてきました。」

七宮さんを部屋に連れてきたあと、自分の席に再び座った。これで依頼人本人から話を聞けるのだが、正直そんなことは頭から離れていった。それよりも、先ほどの七宮さんの発言が気になって仕方がなかった。

『……何も見えなかったんですよ……』

人の心や人格を色として見る事が出来る共感覚を持っている七宮麻奈美さんから唐突に言われ、ますます自分が何者か分からなくなってきた。

しかし、思い出してみると、たしか七宮さんはこう言った。

『色が見えるのは、初対面の人限定で………』

つまり、私は彼女と以前からの知り合いだったということなのか……？しかし、出会った時の反応を思い返してみる限りあれが初対面のはずだ。

………やはりわからない……

どちらにせよ、七宮麻奈美という女性は私の記憶を取り戻す重要なキーパーソンであることに変わりはない。重要なキーパーソンってなんか意味被ってますねはい。

「………さん？」

それから、あの時は話をそらしてしまったが、一色さんに関しての『赤じやない赤』というのも、冷静に考えてみればおかしな表現だ。

「………かちゃん？」

おかしいと言えば、今までの私の行動も。そもそもなんで比企谷家で足を止めたのだろうか……書店で彼と会ったのは果たして偶然なのか？昨日頭の中で聞こえてきたあの声も、結局何だったのかまだわかっていない。比企谷父のメールにあった女性とは本当に私なのか？ならなぜ私を比企谷家に泊めるようにメールしたのか……

あまりにも普通に過ごせたから気づかなかったものの、今思えば、私が過ごした昨日の一連の流れはうまく出来すぎている。記憶はな

い、家族も家も不明。そんな私が一日危なげなく過ごせたのはあまりにも不自然、最悪野宿をしなければならぬ状況だった。

そんな中、一人の男子高校生に声をかけられただけで私の危機的状況がすべて解消された。

ここだけ見ると、その男子高校生はまさにヒーローともいえる偉業を成し遂げたのだ。そして私は、そのヒーローに恩返しをしなければならぬのは確かだ。私といるだけで十分ご褒美、なんてことは流石にこの場面では言えない。いやでも、それでほんとに彼にとってご褒美というのなら可能な限りご一緒するけどね？

でも、

私としては

やっぱりちゃんとしたお返しを――

「――冬華？」

「ひゃっ?!」

「うおい!!」

本日二度目の奇声。まったく、何度も驚かせてくれるぜこのジャリボーイは。だが言い訳をさせてもらうと、同世代の男の子に急に名前と呼ばれて冷静でいられるほど男慣れしてないのだ。今回も大目に見てほしい。

とはいえ、朝からほんとに恥ずかしいなあ……ほらあ、皆さんからの視線がとても痛いよお……

「橙山さん、やっぱり転校してすぐ休日での部活は大変だったかしら……?もし無理しているのなら今日はもう帰っても大丈夫よ?」

どうやら雪ノ下さんは人一倍仲間思いのようだ。こんなに純粋に優しくされると変な理由で困らせたことに心を痛める。

いくらめんどくさいとはいえ、ここまでくると帰ることは出来ない。

「いつ、いえ……！私は――」

「え、マジで？なら俺帰りたいんだけど。」

……

一瞬にしてこの場の空気が静まり返った。

どんな状況でも、やはり彼はいつも通りだった……

「比企谷君？」

「ヒツキー？」

「先輩？」

「……………」

さっきの視線が全て比企谷くんに集中した。というか、無言でただ見てる七宮さんが地味に怖いんですけど。

「んんっ!!……さて、そろそろ本題に入ろうか。」

視線に耐えられなくなった比企谷君が話を進めた。初めからそうしてればよかったのに……

* * * * *

……………さて、これからどうしたものか……

え、話し合い？なんというか、何も聞いてませんでしてへっ♪いやだってね、ほんとに必要だったあの会議？三人寄れば文殊の知恵という言葉があるけど、知恵が出てても所詮は高校生。探偵まがいのことをしても底が知れてる。

結局、真相を解明出来たわけでもなく、お昼時になったので、みんなで昼食をとることにした。しかし、ここで私が小町さんから頂いた弁当を出してしまうと比企谷と弁当が同じということを見せてしまうため、私だけ屋上で食べることにした。

「はあ……………こんな感じでいいのかなあ……」

初日で勝手がわからなかったが、この部活の大体のことはわかった。

わかった上で、少し不安を感じていた。このペースだとなかなか終わらないだろう。なので、あの会議での進行の遅さに疑問を抱いていた。

……………まあけど……

『絶対見つけるから安心してね、まなみんっ!!』

『ええ、どこかの屍君に手紙を見られる前に必ず見つけるわ。』

『おい、こつちを見ながら屍とか言うんじゃねえよ。うっかり脈測つちやっただろ……。まああれだ、うちの部員たちはやる気みたいだから心配すんなよ。…一応、俺も仕事はするから。』

『……皆さん………はいっ、ありがとうございますっ………!』

部屋でずっと暗い顔だった彼女も、少し元気になったことを考慮すると、あの会議も一概に必要だったとは言えないかな。

そんなことを考えていると、屋上の扉が開いた音がした。

「あ、あの…：橙山先輩っ。」

「あれ、どうしたのかな七宮さん？」

「その、ご一緒してもいいですか…?」

「え?あ、うん。それはいいけど…」

どうやら私をわざわざ探しに来たようだ。一色さんとは食べないのか…?」

「それでその…：橙山先輩…」

「ど、どうしたのかな…:??」

あ、あれ…：私ホントに何かしたかな…?」

「今日は、ありがとうございます…：橙山先輩が部室に連れて行ってくれたおかげで少し楽になった気がします。」

……………あー、そのこと。そんなことね。

「お礼なんて別にいらないよ。実際、私が今日したのはそれくらいだから。」

「それでも…：あの時声をかけてくれたから………何かお礼をしたくて…」

ホントにいい子だなあ………ここまで純粹だと逆に心配になって

くるよ。ここで何も言わなければ彼女が納得しないだろう。ここは……

「んー、じゃあ二つだけ、私のお願い聞いてくれない？」

「は、はいっ！私が出来ることなら……！」

「じゃあ一つ目は、私のことを名前で呼んで？」

「えっ？そ、そんなことでいいんですか？」

「うん。ダメかな？」

「いいいえ、そういうわけでは！」

再度言うが、私は群れることは好まないし、なるべく人とは関わりたいくない。嘘ばかりで作られた関係などこちらから御免だ。もちろん、七宮さんに親しい友達がいらないことを哀れんで言ったわけでもない。

ただ単に、ここまで素直に気持ちを伝えてくれる彼女との仲を深めたくなった。

「では、その……………」

どうやら名前で呼ぶことを恥ずかしがってるようだ。ふふふっ、愛いやつめ。あ、私もこんな感じだったわ。まあいくら可愛いとはいえ、年下相手に心を乱されるようなことは――

「と、どうか……………せん、はい……」

「ぶはっ!!」

どうやら私はとんでもない核兵器を作ってしまったらしい。思わずお持ち帰りしたくなつたぜ……

「だ、大丈夫ですか!？」

「ご、ごめんね……………ちよつと嬉しかったからつい。」

「そ、そうですか?……………えへへっ」

やめて、そんな純粋な笑顔を見せないで……!冬華ちゃんのライフはもうゼロよ!

「あ、あの、でしたら私のことも名前で……………」

「え、あ、そうだね。えつと……………麻奈美？」

「っ！は、はいっ！冬華先輩っ！」

若干百合への道が見えてしまうかもしれない今日この頃。とまあ、内面でお巫山戯するのもこの辺にして……え、本気だっただろって？全部冗談だよ？ホントニホントニ……

「それでその、もう一つのお願いつて……？」

「ああ、そうだったそうだった。あのね………」

さて、ここからが本番。

実のところ、昼食を終えたら七み……麻奈美と二人きりで話そうと思っていた。今回はまだ彼女を部屋に連れて行くということしかしていない。新人として、もう少し仕事をしておかなければ……

さて、私が彼女と何を話そうとしていたかという……

「私と、恋バナしよっか！」

「……………へ？」

とある友人の恋文（ラブレター）④

「こ、恋バナ……？」

鳩が豆鉄砲を食ったよう、という表現がぴったりの表情をしているのは私の後輩である麻奈美だ。私が言うのもなんだが、先ほどまでの真面目な話から一転して軽い話をしようというのだ。戸惑うのは無理もない。

恋バナとは、男子なら修学旅行の寝る前に好きな人を言い合ったり、女子ならもう日常茶飯事に行われるような話題……え、羨ましいのかつて？はっはっは、反吐が出る。

さて、そんな酷評している恋バナを何故するのかというとそれはもちろん……

「うん。私そういう恋愛？の経験が全然なくてさ。絶賛恋愛中の麻奈美さんに話を聞きたくてね。それに、それについて話してる麻奈美が恥ずかしかつてる姿も見たいしっ。」

と、少し笑みを浮かべながら言ったがもちろんそんなことは無い。先ほどの話に戻るが、興味本位でこんなことを聞いているのではない。恐らくあの会議の場では話せなかったことがあったはずだ。人が大勢いる場で話せない情報はかなり有益なものだ。聞いておいて損はないだろう。まあ、素直に話してくれたらだが……

「ええっ!!……は……恥ずかしいです……！で、でも冬華先輩なら……でもでも………うう……」

そこにはリンゴがあった。

いや、もちろん実際にはリンゴはない。だが、そう表現しても問題ないほど真っ赤なりんごが、そこにはあった。

三度言うが、私はこんな話を本気で興味本位で聞いているわけでもない。恥ずかしがるこの後輩の姿を見たかったわけでもない。

しかし再度言おう、お持ち帰りしたい……！家ないけど。
「うぐっ……うん。ダメ……かな？」

可愛すぎて若干鼻血が出そうになった。どっかのゲーマーも言っていた通り可愛い正義、つまり最強だったようだ。一色さんはこれ

に耐えれてるのかな？まあ、さすがは生徒会長というべきか。

しかし、問題なのがここで話してくれなかった場合。いくら仲良くなったからといって流石にこればかりは運次第だ。むしろ、話してくれない可能性のほうが高い。同級生なら話しやすかっただろうが、相手である私は年上で初対面。そんな相手にデリケートなことを暴露するのはなかなか難しい。彼女が私のことをどれだけ信用してくれているかに限る、のだが

「……………絶対に秘密、ですからね？」

涙目で上目遣い…だと?!

よし決めた、家を見つけたらまずこの子を家に招待しよう。

まあ、今はそんなことより……

「わかった、約束するよ。絶対に秘密、だよね。」

私を信用してくれたこの後輩のことを、少なくともこの依頼を受けている間は私も全面的に信用しようと思っただけだ。

「じゃあさ、お互いに秘密を共有しようか。」

「えっ?!……………お互いにとって…冬華先輩のも…ですか?」

私の提案に、麻奈美は少し困惑していた。

「私もさ、誰にも言えない秘密があるんだよね。私だけ聞くのも不公平でしょ？だから私も教える。……………どうかな?」

「そっそれはいいですけど……………そんなことしなくても私は」

「それはダメ。」

自分でも驚く程冷たい声が出た。

なぜかはわからないが、秘密の共有に関しては私の中で譲れないものがあるのだろうか。

「秘密はね、使い方によっては脅しの道具にもなるの。だから共有。お互いに弱点を知っておかないと。」

まるで過去に何かを経験しているかのようだ。反射的に言葉が

次々と出てくる。その間、麻奈美は多少おびえてはいるが、私の目を見てじつと聞いている。

「だから、お互いにお互いを信用する契約、しよ？」

そういうと私は、彼女の前に指を突き出した。契約とは、俗に言う指切りと呼ばれるものだ。そして若干恥ずかしいです

麻奈美も驚いた表情をしていたが、一瞬で事を理解したようで彼女も指を突き出した。

「ふふっ、冬華先輩って、意外とこういうこともされるんですね。」

「うんそこには触れないでもらえると嬉しいかな……」

こうして、比企谷君以外の人で初めて、事情を知る人ができたのだった。

* * * * *

まず初めに、私から自身の事情を説明した。信じてもらえないことは覚悟してたが、麻奈美は何の疑いもなく信じてくれた。彼女いわく、自分のことを信じてくれた先輩のことは絶対に信じる、だそうだ。一人だったら絶対泣いてたよ……。

話のついでに、記憶喪失以前の私と何か関係を持っていたのかと聞いてみたが、麻奈美とは今回が初対面のようだ。今回は先日の比企谷家のような初対面のふりをしているわけでもなかった。

さて、いよいよ麻奈美の話聞くことにした。

「その人には、直接何かされたわけではないんです。」

そう語り始めた彼女の目は、間違いなく恋する少女の目だ。

「私はただ見ただけでした。いつかこの感情が冷めるのを待って、待って、待ったけど、むしろどんどん熱くなってきた……もう、見るだけは嫌だったんです。」

私でなくてもわかる。彼女のこの感情に嘘はないと。

「だから勇気を振り絞っているのは相談したら、古典的だけど手紙で思いを伝えるのはどうか、とラブレターを勧められたんです。」

……まあ、半分冗談だったらしいけどね…

「試しに気持ちを紙に書いてみたら、なんだかいっぱい書けちゃって…
／＼」

……もうこの状態で告白したらオツケーもらえるんじゃないの…
…控えめに言つてめっちゃくちゃ可愛いよ君。

「ただ、今まで見ることにしかしてない私にはその人との接点なんてなかったものですから、渡すことに困ってたんですよ…そんなとき、いろはが代わりに渡してくれるって言ってくれたんです。」

ああ、一色さんなら渡す相手と接点があつたね。

「けどその手紙は…」

わかってるよ、だから依頼したんでしょ？君の悲しい表情は見たくないよ…

「んんっ！えっと、その人を初めて意識したのはいつなのかな？」

「あ、すみません…！」

そういうと、麻奈美はすぐさま表情を元に戻した。

「えっと…意識し始めたのは、私が文化祭実行委員をやってた時です…！」

文化祭…なるほど。

「ねえ麻奈美」

「はっはい、何でしょうか冬華先輩…？」

少し困惑した後輩の返答を聞くと、私は口元をにやけさせて、

「私、多分手紙がどこにあるかわかったんだけど、取り戻しに行かない？」

……

「えっ？」

* * * * *

食事も終わり私は一人廊下を歩いていた。

廊下はやつぱり肌寒いなあ……外のほうがちよつと温かいかも……。さて、屋上で麻奈美に言ったことだが、もちろん冗談ではない。確証はないが、高い確率で私の予想は当たっているだろう。それさえ確認できれば、もうこの依頼も終わったも同然だ。

そのためには、もう一人協力者必要なのだ。私の考えに関連していて、なおかつ麻奈美の事情を深く理解していて、それでいて麻奈美が信用している人に……

もしこの行動が間違っていたら素直に怒られよう……

そう決心しながら、私はその協力者として必要な人物に声をかけた。

「あの、急にごめんね？ちよつと二人つきりで話せないかな？」

とある友人の恋文（ラブレター）⑤

「急に变なごこと頼んでごめんね？あなたの協力が必要でさ。あつ、念のためカバンも持ってきてもらってもいいかな？」

若干無理やりで気が引けたが、何とかこの人に協力してもらおうことができた。

告白のサポートなどまっぴらごめんだが、ラブレターは形に残ってしまうものを無くすのはとても不安なことだろう。早々に見つけてあげないと。

告白をするという行動に出たことは良いことだが、この件について麻奈美が反省すべきことが一つある。

それは、肝心の思いを伝える役を他人に任せた、いや押し付けたことだ。

行動とは、ある目的が定まっており、かつ失敗するリスクがあつて初めて意味を成す。

失敗するかもしれないという可能性があるからこそ人は必死になれるし、仮に失敗しても、失敗した結果から経験をえられる。

だが、肝心の実行することを他人にやらせては、行動する経験も失敗から得られる経験もなくなる。そんなものにハッキリ言つて意味はないのだ。

まあ、そんなことを考えていると目的の場所についた。

「さつ、ここだよ。早速探そうか。」

麻奈美の、想い人の教室、

「ねっ、一色さん？」

二年F組の教室に――

* * * * *

「へえ、やっぱりJ組よりは席がたくさんあるんだね〜」

「そういいながら、自然と一つの机の上に座った。」

「えつと……それで、私はどうすればいいんですかね……?」

戸惑いながら、一色さんは訪ねてきた。

みんなの中から一色さんだけ呼び出したのだ、気になるのも無理はない。

「ん? ああ、その前に話したいことがあって。」

「話したいこと……ですか?」

相変わらず戸惑いの表情のままの一色さん。そろそろ話を進めることにしよう。

「ふふっ、そんなにかしこまらないで? 麻奈美のことだよ。」

安心させるように、私は微笑みながらそう言った。

「あー、麻奈美のことですか。……え、麻奈美って、橙山先輩知り合いだったんですか?」

「さつき屋上でね、お互い名前と呼ぼうって言ったの。」

「へえ、あの子がそんなことを……。」

一色さんは意外そうな顔をして、半信半疑の様子だった。まあ、とりあえず本題に入るとしよう。

「一色さんの友達だけあって、面白い子だねっ。思わず話し込んじゃった。」

話の切り口としてはこんな感じでいいだろう。さて、ここから――

「そーなんですよっ!!! 面白いですよね麻奈美って!!!」

!?!?

「一見無口そうな感じするんですけど、話してみると楽しくて！話し込んで気づいたら下校時間すぎてたつてこともあったりしたんですよ！あっ、私のことなんか言ってますでしたか？ちよつとオーバーにとらえちゃうところあるからその辺が心配なんですよねー。でも、プラスのこと言ってたならそれはホントのことなのでそのまま解釈しちゃって大丈夫ですよ。それから——

「ちよ、ちよつと待って！わかった、わかったから！一旦落ち着いて？」

「はっ……！すつすいません……つい……」

びっぴっくりした……。さっきの表情から予想だにしない反応だったよ……。予想してなかった反応だったが、

しかし、これで確信した。

「ホントに仲いいんだね、二人は。」

「まっまあ、そうですね……」

照れているのを隠すように、一色さんはサラッと返事をした。

「でも不思議だよね。一色さんと麻奈美ってパツと見タイプが違うから接点なさそうなんだけど。」

「まあ、ちよつとしたことがありまして……」

ファーストコンタクトの話は気になるが、今は置いておこう。

「一色さんはともかく、麻奈美って友達あんまりいなさそうじゃない？なんでなんだと思う？」

はい、盛大なブーメラン。友達どころか現在家族もいません。

「あー……。何といますか、さっき話した麻奈美が視えるってやつが、その、変な方向に改ざんされて周りに広まりまして……。そのせいだと思います……」

先ほどの興奮していたのが一変して、暗い、悲しい表情になった。申し訳ないことを聞いたとは思いますが、これについての謝罪はすることはないだろう。

「そっかあ、でもさ、」

まあ、悪いとは思ってるけど、私のことは許さなくていいよ。

「実際、気持ち悪いよね、麻奈美って。」

「……………え？」

少し間が空いてから、呆けた返事が来た。

「だからさ、なんか気持ち悪くない？色が見えるとか何言ってるのって思わない？」

嘲笑しながら、私は話し続ける。

「……………急になんでそんなこと……………」

「いや、ずつと言いたかったんだけど一色さんが妙に麻奈美に好意的だったからさ。あ、もしかして私が麻奈美のこと悪く言ってたって言いふらすかもしれないって思ってる？大丈夫、言わないって約束するから。だから、一色さんも我慢しないで言っていんだよ。」

私は机から離れ、一色さんに近寄っていった。

「一色さんも大変だよ。周りにいい人アピールするためにあんな子と話さないといけないなんて。」

「…わ、私は……………！「あ、もしかして！」

わざと大きめの声で被さるように話し続けた。反論する隙を与えない。

「教師から頼まれてるの？あの変人の面倒を見るようになって。だとしたら、その役私がやってあげようか？生徒会長が変人と絡んでるなんて広まったら大変だもんね。」

さっきは反論しようとしていた一色さんが、下を見たまま少し震わせて黙っていた。

「だが、それでは困る。」

「それとも、」

早く、早く私を、

「私から麻奈美に言ってあげようか。」

無理やりにも黙らせる…!

「いい加減気持ち悪いから関わるなって——

——パンツ!!

決して大きい音とは言えなかったが、私が受けたビンタの音は教室中に響き渡った。ていうかめちやくちや痛い…。まあ自業自得なんだけど。

ビンタをした一色さんを見ると、涙を浮かべながら私をにらみつけていた。

「…初めは、先輩方と同じで優しい方だと思ってましたが、やっぱりそう何人もいませんよね…そんな人は。」

少し諦めたような表情をし、一色さんは話を続ける。

「ちよつと他の人には見えないものが見えるってだけなんですよ。それだけで、あとは普通に可愛い子なんですよ。」

類は違うが、やはり同じ顔だ。

「話しかけるだけで嬉しそうな顔する、ちよつとのズルもしない真面目な子なんです。」

これは、屋上で麻奈美が見せた、“好きな人”の話をするときの顔だ。

「多分、多くの人が先輩と同じことを思ってるんでしようね。…一歩間違えれば、私も同じ考えになっていたと思うと、少しゾツとします…。」

そういうと、一色さんは私の目をジッと見ながら近づき、

「……………今日、ちよつと知り合った程度の人が、私の……………」

私の胸ぐらをつかみ、

「私の『親友』のことを、悪く言わないでくださいっ!!!」

そう言った。

言い切った。

一切言葉を濁さず、

遠回しな言い方をせず、

ただただ真っ直ぐに、

私の親友、と。

「……………そっか。それは……………」

思わず口からでてしまった私のこれは、納得ではなく

「それは…ホントに良かった……………」

純粋な安堵だった。

「良かったって……………、何がですか……………!?!」

「いやあ、ここで私に同調なんてされたらどうしようと思ってたから。」

「そんなことするわけじゃないじゃないですか!! 一体何言ってるんですか!」

どんどんヒートアップしていく一色さん。そろそろ呼んだほうがいいかな……………。

「さて……………ちゃんと聞いてた? 麻奈美。」

「…え?」

私がそう問いかけると、教室の扉が開き、麻奈美が入ってきた。

「…麻奈美?」

「…いい、いろは……………わっわたし……………ごめんなさい……………ホントにごめんなさい……………」

入ってきたと同時に、麻奈美は泣き崩れ、一色さんはすぐさま麻奈美に駆け寄った。

「なっなんで? なんで麻奈美が謝るの?! 麻奈美は何も悪くないよ?」

「違うの……………! ホントは知ってたの……………知ってたのに私……………」

何を言っているのか、どういうことかわからず、一色さんは困惑していた。

「失いたくなかったんだよね、一色さんを。」

「私を……？？どういうことですか……？」

さつきまで目の敵のように見ていた私のことを、今では救いを求めるような目で見ていた。

「私さ、麻奈美からラブレターを一色さんが預かるまでの経緯を詳しく聞いたんだけど、」

『あ、あのいろはっ！……昨日言ってた手紙、書いてきたんだけど……』
『おー、麻奈美にしては積極的じゃん！ホントに好きなんだね、その人のこと。』

『でもどうしよう……、緊張して渡せる気がしないよ……やっぱりやめようかな……』

『待つて待つて！せっかく書いたんだから、渡さないともつたいないよ。あつ、なんなら、私が代わりに渡してこようか？』

『え!?!でっでも、それはいろはに悪いし……』

『大丈夫大丈夫、その人の靴箱に入れるだけだし。……それで、そろそろ相手が誰なのか知りたいなー。』

『……やっぱりやめるよ。』

『えーなんで！そんなに知られたくないの？』

『だつて……』

『だつて？』

『……相手は、いろはの“好きな人”だから……』

『……えっ……？それって……』

「そのあと私はちゃんと！——」

「ちゃんと、葉山つて人だと答えた。麻奈美にはずっとその人が好きだと言ってたから、麻奈美が言ってる人は葉山くんだと思ったんで

しよ?。」

「……………どういふことですか…」

「だから麻奈美は謝ってるんだよ。ホントは“知ってた”って。」
「……………え?。」

——屋上にて

『わかってたんですよ。いろはが今はもう違う人が好きだってことは。そして、今の恋が今まで以上に本気の恋だってことも。』

『……………じゃあ、なんで知ってることを言わなかったの?』

『あの時、多分私には葉山先輩が好きってことしか言っていないからそう思ったんだと思います。だけど、もし仮に、私に今の“好きな人”と関わらせたくないんだとしたら、だから嘘をついたんだとしたらって思うと……………言えなくて……………。』

『……………』

『もし凶々しく会わせて、なんて言っただけに嫌われたら……………私はまた独りになる……………。いや、独りになるのはいい、けどいろはに嫌われるのだけは嫌だ……………!それならいっそ、私の恋なんてなかったことにすればいい。』

『……………麻奈美。』

『でも、やっぱり好きなんです……………手紙を書いているときはホントに楽しかった。実際に語り掛けてるみたいでドキドキもした。初めて男の人を好きになったのに……………なんでこんな……………』

『……………』

『ねえ冬華先輩……………、やっぱり普通じゃない私は、普通の恋をしたらダメなんですか……………?普通に、友達と恋の話をするのもダメなんですか……………?……………ふつうに……………好きな人に好きっていうのも……………ダメなんですか……………?』

初めての感情、初めての不安、今までは周りと合わせることに気を配っていた彼女が、初めて心から安心できる場所を得られたことによつてできた、初めての悩み。

それも、一歩間違えればその場所さえなくなるかもしれないというリスク。

どんなに我慢強い人でも、一度幸福を感じればそう簡単にそれを手放せない。

十数年生きてきて初めてできた信頼できる友達、そして初めてできた好きな人。その二つを天秤にかけたとき、両方が大切だったため、彼女の中の天秤は壊れた。

そして麻奈美は、唯一の友達に、初めて「嘘」をついた。自分が好きなのは、葉山先輩である、と。

それに気づかず一色さんは、葉山くんの靴箱に麻奈美の手紙を入れた。しかし、そのあと麻奈美自身がその手紙を回収した。

そう、初めから盗難事件など起きていなかったのだ。

手紙だって、葉山君自身が告発しない限り受け取ったかどうかなどわからない。幸いなことに、葉山くんという人物は普段からモテるらしいので、その心配はなかったのだろう。

しかし一つ誤算があった。一色さんはサッカー部のマネージャーということだ。

一色さんは、親友が初めてラブレターを書いたものだから、思わず葉山くんを確認したのだろう。だがもちろん、手紙は麻奈美が回収したため葉山くんにはラブレターのことなど身に覚えがない。

ここで一色さんは焦る。自分が出した友達のラブレターがなくなった、しかも代役を勧めたのは一色さん自身だ。責任を感じられずにはいられない。

しかも、ラブレターの差出人は麻奈美だ。一色さんと仲良くなつてからも、まだいやがらせなどはあるらしい。もし麻奈美をよく思っていない人たちの手に渡れば盛大なネタにされるだろう。

もちろん麻奈美自身にはこんなこと言えるはずもない。誰かに相談しようとしたら。

だが、奉仕部の人たちから聞いた話では、一色さんが生徒会長選挙に立候補したのは女性陣からのいやがらせだったそう。比企谷くんの言葉を借りるなら、友達（笑）は沢山いるが、信頼できる友達は

いなかった、いや、いるが情報が漏れる可能性があったのだろう。だとすれば、頼れるのは、以前自分がお世話になった先輩たち、奉仕部だ。

切羽詰まった一色さんは、怒られるのを覚悟で麻奈美に手紙がなくなり、そのことを頼れる先輩たちに相談することを話した。

今度焦ったのは麻奈美のほうだ。自分がついたたった一つの嘘が、ことをどんどん大きくしていたのだ。そして麻奈美はまた、手紙消失というありもしない嘘の依頼を、一色さんに任せた。

友達に嘘をつき続ける麻奈美、初めて自分自身の行いに恥を感じ、またそのことに巻き込んでしまった奉仕部に合わせる顔などなく、初め奉仕部に来ることを躊躇した。

もし自分が普通の子だったのなら、別の人を好きになつてたら、こんなことにはならなかったのに。麻奈美はそう考えていた。

——屋上にて

『そんなわけではないでしょ……!』

『あいてっ……でも……』

『じゃあ聞くけど、普通の恋愛ってなに? 麻奈美は自分のことを異常と思いき。だから自分に起こることが全部変だつて思ってるだけだよ。』

『……じゃあ、これが普通、なんですか?』

『これが、とかじゃなくて、人それぞれってこと。考えてみてよ、10歳以上離れた夫婦だつているんだよ? それに比べたら学校の先輩を好きになるとか全然普通じゃない? 友達と同じ人を好きになつたのだって、確率的に言えば普通にあり得ると思うけどなあ。』

『でも……どうすれば……』

『はあ……今回の件で言えば、解決するのは別に難しいことでもないんだよ。』

そう、何も難しくはない。麻奈美は自分の口からこの問題の核心を言っていた。

『私には葉山先輩が好きってことしか言っていないからそう思った。だけど、もし仮に、私に今の“好きな人”と関わらせたくないんだとしたら。』

つまり、そのもし仮に、がなくなればいい。一色さんがそんなことをする人ではないということ。麻奈美に見せつけてやればいい。

まあ、その方法はあまり褒められたものでもなかったが……

「でっでも、ホントに麻奈美が葉山先輩を好きだとは思わなかったんですか……？」

「え？ああ、それは思わなかったよ。麻奈美が、一色さんは自分に好きな人を偽っているって知ってたから。」

初め聞いたときは意味が分からなかったが、麻奈美と話をしているうちによりやくわかった。

『今のいろはは、赤じゃない赤』

これは共感覚で視たものではなく、一色さんから嘘をつかれているという意味だった。露骨に嘘を言われたのが相当ショックだったのだろう。

葉山先輩が好きだなんて“真っ赤な嘘”だ、と。

「そう……だったんですか……」

「ごめんなさい……ごめんなさいいろは……！ホントにごめんなさい……」

「いや、謝るのは私のほうだよ……麻奈美。」

「えっ……、いろは……？」

キョトンとした麻奈美に対し、一色さんは涙を流し、麻奈美を見つめていた。

「麻奈美が考えてた通り、あれは“もし仮に”のほうだったの。」

「……………え？」

「えっ!？」

おっと、思わず声が出てしまった。

でも、え？ホントにそうだったの？

「麻奈美はホントにいい子だし、私の親友だよ？それは嘘じゃない。でも、だからこそ会わせたくなかった……」

「……いろは…」

「あの人……先輩はね？噂とか、他人の偏見とかで人を見ないの。人の本質を見てるっていうか、だから麻奈美が変なものが見えるとか全然気にしないと思うんだあ。っていうか、そんなの気にしたら私がぶん殴ってやる！」

「…ふふっ、なにそれっ」

「先輩の周りには、魅力的な女子が結構いて、私も関わってみてホントに良い人だなあって思えるくらい良い人たちなの。でも、それ以上に麻奈美が凄い良い人だっことを、他の誰よりも知ってる！先輩だってそのことに絶対気づく。そしたら先輩は…私なんかより麻奈美を選ぶに決まってる…」

「そんなこと——」

「あるよっ!!私は、私自身の本質が醜いことを自覚してる……。でも麻奈美は本質から優しいじゃん!!…そんな人に勝てる自信ないよ…」
「醜くなんてないよ!!いろはのほうが魅力的に決まってるじゃん!私を助けてくれたし、いろんな人から認められてる…。私なんて…」
「……………んん?」

「なんでいつも自分に自信ないの!?!麻奈美は自分がどれだけ凄い人か理解すべきだよ!」

「いろはだって!自分のこと過小評価しすぎだよ!!」

「……………これはもしや…」

「麻奈美のほうが!!」

「いろはのほうが!!」

ただ単に互いが互いのことを好きだけなんじゃ…

「可愛いに決まってる!!!」

* * * * *

「はあ……はあ…」

「はあ……はあ……」

かれこれ一時間言い合っていた二人は息を切らし、その場で座り込んでいた。

「…あれ…私たち、なんで言い合ってるんだろう…」

ホントそれな。

「わかんないけど……なんかスッキリしたよ、私。」

さつきまでの泣き顔が嘘のように、麻奈美は笑顔になっていた。

「でも凄いなあ麻奈美の目は。私が嘘ついたこともわかっちゃうんだから。」

「えっ?」

「あれ?私が嘘ついてたのが視えたんじゃないの?」

自身の中で納得していた一色さんの考えは、どうやら少し間違いがあつたみたいだ。

麻奈美の共感覚は初対面の人限定。つまりあの時の一色さんの嘘は共感覚で分かったものではない。

「いろにははまだ言つてなかったね。私が視えるのは、初対面の人だけなの。」

「え、なにそれ初耳!!じゃあなんでわかったの?」

「うーん…、うまく言えないけどなんかわかったの!」

どうやら麻奈美自身わかってないらしい。ていうかあれだけ褒め合ってるならわかりなさいよ。

仕方ない、完全に空気になつてる先輩が教えてあげよう。

「そんなの、一色さんが思つてるように、麻奈美も一色さんのことを親友と思つてるからでしょ。」

そう、親友だから。

ホントに理解している人だから。

理屈なんて関係ない。その人のことをちゃんと見てるからわかった、ただそれだけだ。

「……………」

「……………」

二人は何故かキョトンとし、私のほうをじっと見ていた。

え？なに？どうしたの??

「……………ぷっ、ふふふ……………。せっ先輩…意外と臭いセリフ言うんですね…ふふっ。」

と、思ったらクスクスと笑い始めた。どうやら、私の言ったことがツボに入ったらしい。麻奈美も一生懸命笑いをこらえている。そして私はこの瞬間黒歴史を作ってしまったことに気づいた。控えめに言って穴に埋まりたい…

「いやその、なんかわかってないみたいだったから優しい優しい先輩からのアド——

ここまで言うのと、私のセリフは二人が抱き着いてきたことにより止まってしまった。

「橙山先輩、ホントにありがとうございます！…あと殴ってごめんなさい…！」

「冬華先輩を信じてよかったです…！私だけじゃなくていろはのことまで、ありがとうございます…！」

せっかく泣き止んだ可愛い後輩たちが、私に抱き着きながらまた泣き出した。…全く、勘弁してほしい。

「もう、可愛い顔が台無しだよ二人とも。それに、これは部活動の一環だしね。私より、迷惑かけた人は他にいるでしょ？とりあえず、涙ふいたらその人たちにまず謝りに行きなさい。」

「はいっ！」

とりあえずメイク直さないよ！と言って一色さんは教室を出ていき、麻奈美もそれに続いて出ていこうとしたが、教室を出る直前で足を止めた。

「どうしたの、麻奈美？」

「手紙ですけど、自分でちゃんと渡してみようと思います。今度は、必ず。」

「そっか。うん、それがいいと思うよ。」

「それからあの…、今日だけじゃなくて…これからも私は冬華先輩

の後輩でいたいというか……その、私また先輩と……！」

……ホントに参った。

私がこの子たちに接するのはこの件の間だけと考えていたことも見抜かれていたようだ。

「……うん、わかつたよ。ちゃんとわかつたから安心して？また何かあつたら、いや何もなくても、またくればいいから。」

「……っ！はいっ、ありがとうございます!!」

「麻奈美ー！あんたも顔酷いことなってるんだから早く来てー！」

「ほら、一色さん呼んでるよ？行ってあげて。」

「はい。それじゃあまた、冬華先輩！」

「あ、待ってー！」

「はっはい？」

「麻奈美の好きな先輩の名前、ちゃんと教えてくれない？」

「え!?!……今、ですか？」

「うん、お願い。」

「えつと……、〃比企谷八幡先輩〃……です……！」

「……やっぱね！ありがとう、もう行ってあげて。」

私がそう言うと麻奈美は頭を下げ、教室をでていった。

これで、ちゃんと依頼は完遂できたのだろうか。

まあ、あの二人が笑いあっていたのだ。少なくとも失敗ではないだろう。

「とつても魅力的な後輩に好かれたね、〃先輩〃。」

「……お前……」

教室の後ろ、丁度麻奈美や一色さんがいたところから死角になっている場所に、私と呼んだ協力者に隠れてもらっていた。

そう、麻奈美と屋上で話した後、私が協力を頼んだのは一色さんではなく比企谷くんのほうだ。

比企谷君に無理を言つて教室に待機してもらった後に、一色さんを呼び出したのだ。

「まさかとは思うけど、聞えなかったとか言わないよね？」

「いや流石に聞こえてたけど…、俺聞いててよかったのか？」

「本人の口から聞いてもらわないと、ラブレターもらつてもイタズラと勘違いしそうだったから。」

「何この居候さん、俺のこと理解しすぎてて怖いわ…。」

しかし、なんで私はこんなことをしたのだろうか。後輩たちのことはともかく比企谷君のことについては完全に蛇足だ。

なんとなくそうすべきだと思った……？

『親友と思ってるからでしょ？』

自分の言葉が脳裏に再生される。

私と彼は親友？いや、どうにも腑に落ちない。一体どういうことだ

……

『早くしろ冬華！』

!?

なんだ今のは。

今の比企谷君のセリフが、頭の中でも響いた。

やはり彼は何か知っているのか？私のことを……

君は誰なの？私のなに？私は一体——

「雪ノ下が俺たちの帰りが遅いって怒ってるらしいぞ。由比ヶ浜から連絡があった。冬華も早く戻るぞ。」

「えっ？ああ、うん。」

この時、私は考えすぎているあまり気づいていなかった。

彼が、今日私のことを名前で呼んでいたことに。

つまり私は最初から間違っていた。

「たでーまー。」

「ま…またお邪魔します。」

再び比企谷家へ。

気づけば夕方になっていた。

依頼達成の報告を奉仕部にした後、私と比企谷君はみんなよりも早めに帰らせてもらった。

私は早く帰るつもりはなかったのだが、今回一番依頼達成に貢献した私は疲れているため、今日は早くに帰らせるべきだ、と比企谷君が言ってくれたのだ。

と、ここまで聞くとただの気が利く優男。

そのあと私はみんなに挨拶をして帰ろうと部室を出たのだが、

『すいません、ではお先に失礼します。』

『ええ、お疲れ様。』

『またねっ、冬華ちゃん！』

『んじやな。』

『ちよつと待ちなさい。』

何故か比企谷君を引き留める雪ノ下さん。

それもそのはず。一見普通の挨拶をしていたかのように思えるが、

『何あなたまで帰ろうとしているの比企谷くん？』

私に便乗して、比企谷くんまで帰ろうとしていたのだ。

確かにね？確かに第三者からすればこの行動はおかしいと思うのは当然。

しかし、私にとっては比企谷くんと共に帰ることは必須事項なのである。

何故なら、私は学校まで比企谷くんの自転車に乗ってきたため、道を覚えていないのだ。

流石比企谷君。状況判断能力が凄い。ナチュラルに帰ろうとしたのも、私と帰ることを深く追及されなかったためにわざとだったのか。

『いやほら、そもそも今日は土曜だし、早く帰って寝たいんだけど。』

マジで帰りたいただけかよ。

ということはこの男、私を変える理由のために利用したの!?

『百歩譲って帰ることはいいとして、何故橙山さんと一緒に?』

『あっーそーういや朝も一緒だったよね!』

由比ヶ浜さんは今朝のことを思い出し、さらに追及してきた。

めっめんどうなことに……

……

……

……

……なんてことは少しも思わない。

私一人なら面倒な展開になっていたかもしれないが、こっちには必
衰の専業主夫希望がいる!

『お話しするのが遅くなりましたが、私と比企谷くんは親戚でして。
今は比企谷家に泊まっているんですよ。ね、比企谷君?』

以前小町さんが私に使った嘘。それをあえて使うことで話を合わ
せてほしいことを伝えた。……おつと、その顔はわかってくれたよう
だ。よし、これで比企谷君がホントのように演技をすれば――

『おっおっ……、そっそーうなんだよ……。こいつはそーう……親戚でさ。』
下手かおい。

これだと余計に疑われる……。何か他の、

『小町さんも、この件も承認してくれているので。』

咄嗟に言ってしまったが、苦し紛れもいいところだ。

たかが中学生一人介入させたところで――

『小町さんが?なら問題ないわね。』

『小町ちゃんが知ってるなら安心だねっ!』

部員である兄よりも信頼されている、小町さんなのであった。

* * * * *

小町さんのおかげで比企谷君も帰ることができたので、話は冒頭に

戻り私は無事比企谷家に着いた。

「おーい小町ー。……あれ？いないのか？」

「しーっ。比企谷くん、ここにいるよ。」

「えっ？…ああ、なるほど。通りで。」

私たちに反応できなかったのも無理はない。

受験生である小町さんは、勉強で疲れたのだろう。ソファアースやすやと寝ていた。

「起こすのもあれだし、今日は俺がご飯作るか。」

そういうと、比企谷くんは渋々キッチンへ向かった。

自分で高スペックと言い張るだけあって、料理もできるようだ。

「ちよつと待って。流石に何もしいまま住まわせてもらうのもあれだから、ご飯は私が作るよ。」

思い返してみれば、昨日今日と私は何もしていない。いくらこの人たちが気にしないと言っているても、申し訳ない気持ちでいっぱいだった。せめて、何か役に立ちたい。

「いや気にすんなよ。普通に生活してるけどお前記憶喪失なんだから？休めるときは休んどけ。」

「じゃ、じゃあ、リハビリの一環として、ね？以前の私がよく料理してたのなら、調理中に何か思い出すかもしれないし。」

「おっおっ、そうか？……じゃあ、頼んでもいいか？」

「…っ！う、うん、まかせて！」

言っておいてなんだが、比企谷くんの性格なら最後の最後まで断ると思っていた。もちろん、そうなっていたとしても意地でも料理するつもりではあったが、

私に料理を任せたと、比企谷君は「ちよつと自室で休む」と言っ二階へ上がっていった。どうやら相当疲れていたようだ。

さて、キッチンに来たまではない。問題はここからだ。

果たして私は、ちゃんと料理できるのか……？

いやね？勢いで言ってしまったけど、自信はミジンコもないんですよ。

仮に料理がダークマターになってしまったらコンビニに行って買

いに行こう、うん。

「さてと、まずは食材の確認つと…」

冷蔵庫を確認してみると、ある程度の材料三人分あった。恐らく小町さんが買い物に行ってくれたのだろう。

「あんまり遅くなってもあれだし、簡単にできるものにしよっかな。」

そう呟き、私は調理を進めた。

* * * * *

「ふあ〜……ん？これは…全部冬華が作ったのか？」

ほぼ全ての料理をお皿に盛りつけていた時、二階から比企谷君が下りてきた。

「はい、どれも簡単なものですけどね…。よく眠れましたか？」

「ああ、おかげさんで。全部任せて悪かったな。大変だっただろ？」

「ううん、さつきも言ったけどホントに簡単なものしか作ってないから。」

何の謙虚もなく、ホントに簡単なものしか作っていないので苦笑いしながら答える。

比企谷君はキョロキョロしたあと、「小町は？」と聞いてきたので、
「またも苦笑いしながらまだ寝てる、とだけ言った。はあ、とため息をした後、比企谷君はソファアールへ向かう。」

「ほれー起きろー。飯だぞー。」

ペしペし、と小町さんの頬を叩きながらそう言ったあと「ふにゃ？」と聞こえた。めっちゃ可愛かったです。まる

「わーご飯できてるー。」

「いつまで寝ぼけてんだよ…。早く座れ」

「はーい。」

「あはは……、じゃあいただきます。」

いただきます、と私に続いて二人もいいお箸と手に取る。だが、私は料理に手が伸びない。

なぜなら料理を作るのに必死で味見をしていなかったのだ。もし変な味だったらどうしよう…と気が気でなかった。

二人はなんの躊躇もなく私が作った料理を口に運ぶ。

…ダメだ、胃が痛くなってきた……

「んー！こへすほくほいひいへふほー！」

「先に飲み込め、何言ってるのかわかんねえよ…」

そう言われ、小町さんは急いで口の中のを飲み込んだ。

「これ凄く美味しいですよ！料理得意だったんですね！ねっ、お兄ちゃん！」

「ああ、マジで美味しい。家庭的っていうか、なんか馴染みある美味しさだ。」

ふう……どうやら大丈夫だったみたいだ。それを聞いて安心したせいか、私も一気に空腹感に襲われる。

「いやー、こんなに美味しいものができるような食材買ってたかな？」

「まあ、ホントに料理上手いやっはどんな食材でも関係ないってことだろ。」

思っていた以上に高評価のようだ。だが、最も料理の味に驚いていたのは、

「うっ美味しい…！」

私だった。

え、うそ、料理までできるの私！高スペックすぎてそろそろバチが当たるんじゃない？

と、心の中でドヤ顔を決めていた。

そして食後。

私は皿洗いまでするつもりだったが、小町さんが作るのは寝ていてできなかったからお詫びに片付けはしたい、と言ってきた。だが、そもそもこれは居候している私のせめてもの恩返しのもつもりだったので、ホントは一人でしたかったが、間を取り二人ですることにした。

「ホントにすいません冬華さん。料理だけじゃなくて片付けまで。」

「ううん、何もしないで住むわけにもいかないし、何なら明日からも私

「が作るよ？」

「では当番制にしましょう！また冬華さんの料理食べたいですし！」

「ふふっ、わかった。頑張るねっ。」

「ここが私の家ではないことはわかっている。しかし、ここはとても心地がいい家庭であることを再認識した。」

「今回の料理、美味しく出来たことは良かったのだが、肝心に記憶に關しては何も思い出せなかった。さて、これからどうするか…」

「しかし、ホントに助かりましたよ。兄一人では、少し不安なところもあつたので。」

「あ、今回はね、無理を言つて私一人で作つたの。比企谷君も相当疲れてたみたいだし、お役に立ててよかったよ。」

「えっ？」

「え？えつて…あれ？」

「何かおかしいことを言つただろうか…？？」

「おーい、風呂入つたぞ。」

「私が戸惑つていると、洗面所から比企谷君の声が聞こえてきた。」

「それを聞くと、小町さんは「はっ…！」と声を出し、表情を切り替え、え、

「今日は冬華さんから入つてください。部活に料理まで疲れたでしょう。あとは小町におつまかせー！」

「と、私の背をぐいぐいと押し、私を風呂場まで連れて行ってくれた。確かに、少しウトウトしてきている。ここは、素直に小町さんに片

付けを任せ、先にお風呂に入らせてもらおう。」

「入浴中、今日の出来事を振り返っていた。」

「実際に部活動をしたこと、

「部員や生徒会長に会つたこと、

「依頼人が共感覚の持ち主だったこと、

「名前で呼び合える後輩ができたこと、

「本気の恋をしている人を間近で見たこと、

「そして、泥臭くも美しい友情を初めて見たこと。」

色々あった。

初めは退部する気で学校に行ったのに、帰ってくる頃にはこの部活も悪くないかもと思ってしまう。当初は一人でいることこそが正解という

我ながら笑ってしまう。当初は一人でいることこそが正解という風に考えていた。

実のところその考え自体は変わっていないと思う。

しかし、他の人に……部員や後輩、先生と接していく中で、誰かと一緒にいるのも良いと思い始めている。

この感情は、元の私のもなのだろうか……。

だとするならば、一人で頑張ろうという考えは、初めから間違っていたのか？

やはり、もっと人に頼っていくべきなのか？

事実、昨日今日と、人に頼ったことで困ったことは解決できた。

考え方を変えるべきなのかもしれない。

そう結論に至ったころには、疲れがピークに達していた。

早々にお風呂から出ようとしたとき、ヘアピンを取るのを忘れていたことに気づいたが、今更洗いなおすのも面倒だ……。すぐに寝ることにした。

「ねえ、お兄ちゃん。今日冬華さんが料理してるの見てた？」

「ん？いや、昨日ちよつと遅くまで起きててな。眠気がヤバかったから、料理は任せて自分の部屋で寝てた。」

「そっかあ……。うくん……。」

「どうした、どうやって料理作ってたのか気になるのか？」

「んー……。一人で作ってたっていうのがちよつと……。」

「そんなにおかしいか？」

「だって、――――」

何やら一階から会話が聞こえてきたが、すぐ意識を手放した。

* * * * *

皆さん午前中だけ心身ともに休める日曜日。

なんか午後になつたら明日のこと考えちゃうよね。

昨日は早めに寝たおかげか、疲れが一気に取れていた。心なしか体が軽い。何か無駄なものが抜けていった感じだ。

さて、今私は制服を着て学校へ向かっている。もちろん日曜の朝6時から好き好んで外に出ようとは思わない。だがいい加減、学校までの道のりを覚えておかないと今後また比企谷くんに迷惑をかけるかもしれない。というか、学校までの道は覚えていなかったことが不思議だった。

そういえば、気づいたとき私は廊下の真ん中に立っていて、いい加減教室までの通路を覚えろ、と平塚先生に言われたことがあった。道を覚えるのが苦手なのだろうか……。

今日の話は、朝すでに起きていた小町さんに伝えてある。散歩のついでに、何か手掛かりになることも探すことにしよう。

まずは学校。

携帯で道を確認しながら歩いていき、数十分でたどり着いた。なるほど、確かにこの距離なら自転車通学にするべきだね。

さて、メインの目的は達成されたわけだが、ここである発見があった。

学校に行くまでにある公園や公共施設、小中学校の場所は覚えていた。

場所を覚えているということは、この付近に住んでいたのか？と思いい、交番で「橙山」という苗字の家があるかどうか聞いてみたが、少なくともその交番でわかる範囲にはいなかった。結局はまた振出しに戻ることになった。

今は少し歩き疲れ、公園のベンチで休んでいる。

日曜日だというのに、それなりに人がいる。みんな元気だなあ

……。お家で休もうとは思わないのかね。

「あつ、冬華先輩！」

「……!？」

名前を呼ばれると思っていなかったので体がびくついてしまった。呼ばれた方向を見ると、先日私の後輩となった麻奈美だった。

「ごつごめんささい！急に声をかけてしまつて……」

「気にしないで?!私の気が抜けてただけだから。」

割と気にさせたみたいで、申し訳ない気持ちでいっぱいになる。自然と苦笑いで返答した。

「あ、あの！昨日は本当にありがとうございました。昨夜からずっと言おうと思つて……、今日会えてホントに良かったです！」

「部活動の一環だけだね。けど、最後のほうは個人的に行動してた……かな？まあでも、凄いことだよ。基本無気力な冬華さんがここまでするなんて滅多にないんだからっ。」

少し暗い表情だったので、私なりに和ませようと試みる。

といつても、基本無気力はホントのことですけどね。……あれ？冗談言つたつもりが全部ホントのことだった てへっ

「ふふっ、先輩つて冗談お上手なんですね。」

冗談であつてほしかったよ。

「そういうえば、先輩なんで今日も制服なんですか？」

着る服がこれしかない、と言つたら余計に心配されそうだなあ……

「ちよつと学校に用事があつてね。転校して間もないから色々やることがあるんだよ。」

理由としては十分だろう。もちろんやることなどないが。

「あー、そうだったんですか。大変そうですね……、だからここで休憩を？」

「うん、そんなとこっ。」

……ここまで何でも信じちやう子に嘘をつくのは心苦しいが、これは心配させないための嘘だ。罰は当たらないだろう。

「家も、この辺りなんですか？」

実は君の大好きな先輩の家に居候してて、昨日は手料理をご馳走し

たんだＺＥ！なんて言えるわけがない。

記憶喪失のことは話したが、どこで住んでいるかとか、そのあたりの話はしていないのだ。

「まあそうだね。麻奈美も？」

必殺質問返し。これであわよくば話題変更ができる。

ちなみにこれは奉仕部部长様には効かない、ソースは比企谷君。

「いえ、私の家はここから少し離れてまして…」

「え？じゃあどうして——」

そう言おうとしたとき、後方からキャンキャン、と一匹の子犬が麻奈美の足元に群がる。

麻奈美はそのことをわかっていたかのように餌を用意しており、餌を与えていった。

「あーなるほど。この子に会いに来てるってわけね。」

「はい。ホントは買ってあげたいんですけど、父がその…犬アレルギーでして。」

「それにしても、ずいぶん懐いてるんだね。ペットとして飼ってる人でも中々こうはいかないんじゃない？」

「そうでしょうか？何度も会いに来てて、気づけばこうなってたものですか。」

麻奈美は嬉しそうに笑いながらそう言うと、私の隣に座った。

「冬華先輩」

私を呼ぶその声には、初めて会ったときにあつた警戒心や若干の恐怖心といったものは一切感じられない。

「私、なんだか今楽しいんです。」

「…うん。」

そう思った理由は容易に想像できるが、どれも単純なものばかりだ。

「初めて、友達とか好きな人とか頼れる先輩とかに出会えて、とても楽しいんです。」

「…そう。」

そんな人たちはいて当然、とほとんどの人は思うのではないだろうか。

それは普通だと。

けど、彼女は普通じゃない。

他でもない麻奈美自身が誰よりもそう感じてきたんだろう。

そんな彼女が、初めて得た普通の「本物」。

どれもすぐに消えるかもしれない。友情なんて特にそうだ。

人は平気で裏切るし、嘘をつく。見られたくない自分を隠し、都合のいい部分だけ見せ騙しとおす。

それでも人は、友達という存在に期待する。

恐らく、生きてる中で本物を目にしてしまうのだろう。本音を言い合える、互いが互いをわかり合っている、本物を。

そんな関係を人は美しいと感じる。

だから欲する。自分だけの美しい関係が。

少なくとも私は、あの日夕焼けの陽が差す教室で、泣きながら抱き合う二人を美しいと思った。

「冬華先輩? どうしました?」

「え…!? ああ、ううん。なんでもないよ。」

麻奈美は私を心配しながら、私の顔を覗き込んでいた。くつ…なんて純粋な目をしてるの…!? 純粋さで言えばその子犬と――

「つて、さつきまでいた子犬ちゃんは?」

「え? あれ!? どこに行ったの?」

子犬がいらないことに気づいた麻奈美はすぐ立ち上がり、周辺を見渡した。

麻奈美があげた餌はなくなっていたので、この場からいなくなつてからそう経っていないようだ。恐らく公園内にまだいる、はず。

「あつ、いましたー」

麻奈美が声をあげ指さしたほうを見ると、確かにさつきの子犬がいた。公園の出口へ元気よく走っている。ここから見えるという

ことは、どうやら私は目が良いようだ。

「っー」

目が良いことがわかると、私は全力で子犬のもとへ走っていった。「冬華先輩!」

目が良いと思っただのはベンチから子犬が見えたからではない。そもそもこの公園はさほど大きくないので出口を言っても距離はそんなにない。

私が見えたのは犬ではなく、公園の向かいにあるミラーだ。

そこに映る、黒い車が見えたのだ。

今の時間帯は人が少ないから、車はそれなりに速度を出しているだろう。ぶつかれば子犬なんてひとたまりもない。

「っ……間に合って……」

何も考えずに全力で走る。後のことなど考える余裕がなかった。とにかく走り、精一杯子犬へ手を伸ばす。

そして、公園の出口ぎりぎり間で間に合い、子犬を捕まえることができた。

「やった……あつ」

間に合ったことへの喜びも束の間、全力で走った上に気が抜けたため、スピードを殺せていない。

早い話、道路に出てしまい、黒い車にぶつかる寸前だった。

目の前には法定速度ギリギリまで出している車。確実に無事では済まないだろう。

せめてこの犬だけは……!

私は体を丸め、子犬を抱きかかえる。

ぶつかる寸前だというのに色々なことが頭によぎり、世界がスローモーションのように感じる。

.....

.....

.....理由はない

.....だがなぜだろう

ふと、今何時か気になった。

理屈じゃない。

ただ単に、今の時間が知りたかった。

車にぶつかるまでもう一秒足らず。

そんな中で、公園にある時計を確認するため、後ろへ振り返る。

——7時35分

今の時刻を知ることができた。

他には何も無い。

ただそれだけ。

その瞬間、私は私の全部を理解することができた。

そうか、

そうだったのか。

やっぱり、

やっぱり私は、最初から間違っていた。

それを理解することができた。

私は酷く後悔した。

悔やんでも悔やみきれない。

もし、「あの時」別の行動をとっていれば…

しかしもう遅い。

子犬を抱え、車にぶつかりそうになっており、そんな中後ろに振り返っているこの状況。

まずい、

まずい、

このままでは私は、確実に助かってしまう。

伝えなきゃ、

誰でもいい、

もしも、

もしも私の考えが届くのなら、

どうかお願い、

比企谷君、

あわよくば貴方が私を、

“私”を殺して——

悪戦苦闘する “非” 日常 boy's side
比企谷八幡への個人依頼

「じゃあ八幡、ちよつとの間家開けるけどお願いね。」

「はいよ。気いつけてな。」

社畜である素晴らしき俺の両親が、数日間家を空けると知ったのは昨日の夜。

その時、妹大好きバカ親父はすでに出発しており家にはいなかった。それ自体は別段珍しいことではない。これは母に関しても同じだ。

しかし、それはどちらか一方だけ、であつたため今回両親二人ともいなくなることに少し驚いていた。

男の上に高校生の俺だけならまだしも、中学生である小町のために必ずどちらかが夜遅くなつても必ず帰ってきた、のだが…

「今回結構重要な仕事任せられちゃつてね……。まあ、任されるついでうのも悪い気はしないんだけど。」

つくづく思う、働く女性はなぜこんなにもカッコいいのかと。

多分あれだな、将来養つてもらいたいから働く人に惹かれるんだろうな。やだ俺つてば根っからの専業主夫。

しかしまあ、これだけ頼れると上司が母ちゃんに仕事を任せるのもちよつとわかるな……

「…ちつ……あのクソ上司…、隙あらば潰してやる…」

クソ上司さん早く謝るか逃げてっ！じゃないと今朝のニュースに出ることになっちゃうよ！

俺の周りの女性たちはなんとまあ好戦的なことか……。そのうちの一人に関しては早く誰かもらつてやってください。

さて、そんなこんなで俺が責任をもって妹を守らなくてはならなくなったわけだが……つまり大して普段と変わらないわけだが。

小町にはいつも以上に帰り道には気をつけろと言いついたが、小

町は無言で部屋に戻っていった。

重要なことなのでもう一度言うが無言だ、無視ではない。ゴミを見るような目をしていたが、あれは無視ではないんだ。

つまり、俺と小町の間にはもはや言葉など不要だということだ。大丈夫だぞ小町、俺には伝わってきたぜ。大丈夫だから安心して、という心の声がない。

ついに妹と心が通じ合った感動で人知れず枕を濡らしたことは言うまでもない。

——ピロンツ

すると真夜中、鳴るはずもない俺の携帯が音を立てた。

いや実際には鳴るには鳴るが、メールを送ってくる相手がいない……って解説させないで？

真つ先に送ってきた候補として浮かび上がったのが平塚先生という教師想いの俺を誰も褒めることはなかった。

「……って親父じゃねえか。」

両親の可能性を考慮しなかったのには理由がある。

母の場合、何か用があるときは決まって電話で用件を伝えてくる。

そして親父は、用があってもなくても連絡するのは小町にするのだ。まあ最近小町は連絡拒否したらしいがザマア。

ようやくそのことに気づいたのかと思いつながら、メールの内容を確認する。

「……………」

雪のヘアピンをつけた女を助ける？

ついにおかしくなったのかと思つたが、わざわざ俺にメールするくらいだ。何かわけがあるのだろうか。

どうせ小町にもメール来てるだろうし、また詳細を聞くことにしよう……。今はすぐさま意識を手放すことにした。

* * * * *

おはよう。

そしてお家帰りしたい。

よし、いつものルーティンだ。まだ家にいるのに家に帰りたいたいが半端ないのはみんな一緒だよねっ！

いやだなあ……起きたくないなあ……、まず起き上がることすら苦痛に感じるんだよなあ……。まあ、結局は起きるんだけどね。

「あ、お兄ちゃんおはよー。結構時間ぎりぎりだから、ご飯早めによろしくね！」

既にご飯を作ってくれている我が妹。時間ぎりぎりなのに待ってくれてるとか朝から感動で泣きそう。

「早くしてねー、小町も遅刻しちゃうから。」

「……ああ、そう。」

……うん、知ってた。待ってたのは俺じゃなくて自転車だつてことくらい。朝から泣きそう。

とまあ、いつも通りに準備をし、後部座席に妹を乗せ自転車を走らせた。

「あつ、そうそう。総武高に転校生が来るんだつてね！」

「え、そうなのか？全然知らなかったわ。」

むしろ何でお前が知ってたんだよ。

「高校に転校生かあ。結構レアじゃない？高校でつて。」

「まあレアかどうかは知らんが、よく転入試験に受かったな。」

総武高の転入試験は全国的に見てもトップクラスらしい。以前雪ノ下が過去問を解いていた時は合格ラインギリギリだったそうだ。

その後数日間、不機嫌だったのは言うまでもない。

「天才美少女……！どんな人か楽しみだねお兄ちゃん！」

「いや何が？」

よくわからないが、目を輝かせやがら喜んでるようだ……多分。自転車こいでるから見えないけど。

しっかし、こいつはどんな情報網を持つてるんだ……。その気になつたら町全体の情報が回ってるんじゃないのか……。

……………ん？

「美少女？転校生は女なのか？」

「あれ？お兄ちゃんもしかしてメール来てなかった？まあいつものことかつ。」

「確かにいつもはAmazonか平塚先生しかメール来ないけどな？」

自分で言ってるあれだが、なんで平塚先生？

「それで、誰から聞いたんだ？」

「え？それはほら、夜中に」

夜中、と聞いて他に小町に聞きたいことがあったことを思い出した。

だが、小町の答えを聞いて、それはもう無駄になってしまう。

「お父さんから。」

* * * * *

天使の送迎という重大任務を完了し、学校についてみればあつという間に昼休み。言っておくが授業中寝ていたわけではない。あれだほら、瞑想だ瞑想。

普段購買部でパンを買っている俺だが、今日は四限目完全に寝ていたため、って寝てたって言っちゃったよ。まあともかくスタートダッシュに遅れたのでロクにパンが買えなかった。

しかし、いつものベストプライスに行くことは変わらない。普段なら戸塚を見るためと言い張るところだが、今回はそれどころではない。一人で考えたいことがある。

夜中に来た親父からのメール。そこに書かれていた雪のヘアピンをつけた女、について小町が詳しいことを聞いているものだと思っていたが、それは違った。

小町にもメールは来ていた。しかし、それは俺のところに来たメールと内容が全く異なるものだった。

『総武高校に美少女が転校してくる』

言っておくが、俺の親父は別格のお偉いさんなどではない。それなりに上の人だが、それだって年齢的にも至って普通の階級だ。

だから、こんな情報を持った経緯が分からない。というかこんなメール来たらちよつとは疑えよ小町…。

つまるところ、結局何が何だかわけわかめな状態なのである。

……

……

……いや待て、

もしこれが俺の知りたかった情報だとしたら…？

つまり、〃雪のヘアピンを着けた女〃についての追加の情報だとしたら…？

もちろん確証はない。俺の親父が女子高生について調べまくってる変態だつて可能性もある。いやないないそれだけはない…と信じたい。

「…まあ、確認だけしてみるか。」

こういう時は、あの人のところへ行くに限る。

空腹を我慢し、俺は職員室へ向かった。

* * * * *

「比企谷、どうしたんだ？君から私を訪ねてくるなんて。」

「いやちよつと、聞きたいことがあります…。」

職員室、ここは何度来ても慣れない場所だ。え？そもそも何度も来るような場所じゃない？あれ、何回も来てるの俺だけ？

「聞きたいこと…？…あー、もしや…：ほほう。」

俺の言葉を聞いて、何故か先生はニヤニヤしている。なに、そんなに面白いこと言った？それならクラスの人気者になれちゃったり

……しませんよね知ってる

「いや失敬。少し嬉しくてね。言わずともわかっている、転校生についてだろうか?」

「え、よくわかりましたね。まあそうなんですけど…、嬉しいって何ですか?」

これはあれか、何か誤解されちゃってるパターンのやつか。俺が他人に興味を持ったことが嬉しい、的な感じで。

確かに聞きたいことは転校生についてだが、知りたいのはたった二つ。

転校生は本当にいるのか。

いるとするなら、そいつはヘアピンをつけているのか。

これを確認して俺はさっさといつもの日常に戻りたいだけだ。

とりあえず誤解を解かないと。そう思い、俺が口を開くより先に先生が話し始めた。

「さっき雪ノ下に、転校生を部室へ呼ぶように頼んだのだが、まさか君と雪ノ下が既に連絡を取り合う中になっていたとはな。このことは雪ノ下から聞いたのだろうか?」

「…え?雪ノ下?」

「おや、違うのか?このことはまだ由比ヶ浜には知られていないから、てつきり雪ノ下から聞いたのだと思っただが。」

俺と雪ノ下が連絡をする仲になっている?ハッハッハッハ実に面白い。面白いからそれ絶対本人の前で言わないでくださいお願いします。

「聞いたのは小町から……ってそれよりですね、転校生ってホントにいるんですか?」

「そんなところから疑っているのか君は…。ああ、ホントだとも。しかも、中々綺麗な生徒だったぞ。その上転入試験は全科目九割超えだ。雪ノ下にとって良いライバルになってくれると助かるのだからね。」

「美人で天才…ですか……。そんな奴ホントにいるんですか?」

「何を言っている、雪ノ下姉妹なんていい例じゃないか。」

「…あ」

それもそうだ。身近すぎて完全に忘れてた。

まあ先生は何が言いたいかというところ、容姿端麗頭脳明晰なのがあの二人なんじゃなくて、あの二人は容姿端麗頭脳明晰である、ってことか。

なるほど、わからん。

「まあ、どこから知ったかはわからないが、ちょうどよかった。」

八幡知ってる！…この後面倒なこと押し付けられるやつだ！

「そうですか、では俺はこれで——」

「まあまあ、面倒なことではないから話だけでも聞きたまえ。」

俺の行動を先読みしていたかのように、先生は俺の肩を掴む。くっ…！なんて速く重い攻撃だ！カカ〇ツトはこんなやつを戦っていたのか！

「というか、後で部室に来るんですよ？その時にでもよくないですか？」

「もちろん、奉仕部として頼みたいことはその時に言うつもりだ。が、今回は君個人に頼みがあるんだよ比企谷。」

「俺個人に？」

「というか部としてまた別に依頼があるのかよ……」

「はあ……、聞くだけ聞きますよ……」

「ああ、それで構わない。何だったら、今から言うことは別にしなくてもいい。」

普段とは違う真剣な声のトーン。俺に立ち去るという選択肢はすでになかった。

「その転校生ついてだが、驚くほどに情報がないんだ。」

「……は？情報が無い？」

「ああ、少ないんじゃない。ほぼないんだ。だから、噂でも何でもいい。もし何か情報が入ったら私に知らせてほしい。」

美少女で天才で身元不明の転校生とか、何のアニメだよ……

そんないかにも主人公みたいな人と関わったら絶対めんどくさいことになる。

机の上に、見慣れないリュックが置いてあった。私物というのはこれのことだろう。学校指定のものではないのですぐに分かった。

さっさと運んで、すぐ教室に戻ろう……よくよく考えてみれば、午後も授業あるんだよなあ……

「つと、いっけね。」

何も考えずにリュックを持ち上げると、思っていたよりファスナーが開いていたのか、ノートが数冊落ちてしまった。

心の中ですまん、と言いつつ拾い上げる。

もちろん、俺は転校生などに興味はない。

もちろん、美少女だからといって特別意識することもない。

だが、

落としてしまった数冊のノートのうち、気になったものがあった。

ノートの柄が変わっているわけではない。

特別ノートが分厚いわけではない。

気になったのは、ノートの表題だ。

ノートノートと言っているが、これは……

「……日記、か。」

いや、日記だから気になっているわけではない。

普通のノートを、交換日記や一般的な日記として使っているのは不思議とは思わない。

何度も言うが、気になったのは表題だ。

あまりに変わった表題だったため、思わず声に出してしまった。

「……………ただ本音を綴っただけの、日記…？」